

グリム童話翻訳の歴史的概観

——著者による童話八編の新訳と共に——

梅 内 幸 信

第一節 日本におけるグリム童話翻訳

一般に、海外の文学に関する研究は、特定の作家ないし文学の簡単な紹介から始まり、続いてその文学作品の翻訳紹介が行なわれ、ある程度作品の翻訳紹介が済んだ段階で、その作家の詳しい紹介と共に、本格的な文学研究が行なわれる。この研究手続きには、ときとして若干の異同があるとはいえ、文学研究の基本的な道筋には、大きな変更は見られない。つまり、文学研究においても、料理のコースにおけるように、胃の消化が支障なく進むように、軽いものから重いもの、そして最後に、口直しへという具合に、研究が行なわれるのである。この意味において、文学研究における「メイン・ディッシュ」は、言うまでもなく、作品および作家の研究ということになるであろうが、しかし、読者の立場から見れば、作品そのものになると言わざるをえない。

日本において、『グリム童話集』は、蘭学を通じてすでに江戸時代から紹介され、一八八七（明治二〇）年に管了法に

よって日本語に翻訳された。その翻訳名は、『西洋古事神仙叢話』であつた。⁽¹⁾つまり、江戸時代に鎖国政策が取られていたとはいえ、長崎では出島を通じてオランダからヨーロッパの文化が流入していたのである。オランダの政治家・文化人、またさらには、これに続く宣教師たちを通じて、「グリム童話」は紹介されたのであろう。というのも、『グリム童話集』の根底を貫いている「勸善懲惡の精神」は、キリスト教の倫理とも通じるところが大いにある上に、これを一般民衆に分かりやすく説く場合に、「グリム童話」は非常に便利なものであるからである。

グリム童話は、日本においてばかりではなく、世界各国においても、非常に愛読されている。古今東西、これほどの読者を獲得している文学作品は、聖書を除外すれば、他には存在しないと言って良いほどである。その最大の理由は、グリム童話が、子どもにとっての格好の読み物であるということになるであろう。しかしながら、『グリム童話集』の原題が、『子どもと家庭のための童話』であるという点からも分かるように、この童話集は、決して子どもだけのために書かれたのではなく、子ども以外の家庭の構成員、すなわち、おじいさんやおばあさん、お母さん、お父さんといった人々のためにも書かれたのである。グリム童話の研究に当たっては、この観点を看過してはならぬであろう。

実際、日本において現在、グリム童話というより、むしろ、童話一般が、爆発的と言って良いほどのブームをもたらしている。その火付け役を果たしたのは、恐らく、『初版 グリム童話集』であろうと思われる。⁽²⁾すでにそれ以前に出版されていた、金田鬼一氏の『グリム童話集』(岩波文庫、全五巻)も存在しているのに、⁽³⁾『初版 グリム童話集』の方が、大変な売れ行きを示しているのである。その理由は、ひとえに、「初版」というところにその理由が隠されていると考えられる。岩波文庫の『グリム童話集』は、第七版からの翻訳である。思うに、一般の読者は、『グリム童話集』が第七版まで出版されているという事実を明確に知ってはいないのであろう。それゆえ、「初版」と聞くと読者は、なにかしら「最も古く、最も原型に近いもの」、従ってまた、「本物である」という印象を受けるのではなからうか。ただし、『初版 グ

リム童話集』が好評を博したという、一層大きな理由は、その「残酷な面」であると言わねばならない。というのも、この翻訳に連動する形で、「残酷シリーズ」ないし「恐怖シリーズ」が次々と出版されているからである。⁽⁴⁾加うるに、そのシリーズは、単に「グリム童話」に関するものばかりではなく、「グリム童話よりもっと残酷な日本の童話」といったタイトルで、続々と出版されている。⁽⁵⁾

童話から少し目をそらして、映画界を覗いて見ると、こちらでも「リング」やら「らせん」やら、新たな恐怖を売り物とする新作が相次いでいる。このブームは、今の日本の新現象かと思えば、どうやらそうでもない。映画の本場と言えるアメリカでも、新種の恐怖映画がブームを引き起こしていると言われる。現代の無機質の若者には、恐怖が合うらしい。筆者の目から見れば、現代の若者は個性に乏しく、それがゆえに逆に、強烈な個性を求めているように思われてならない。恐怖は、快感とは違って、存在を凝縮させる力である。恐怖の凝縮力によって、若者たちは、自分の存在感を必死に確認しようと努めているのであろう。⁽⁶⁾

いずれにせよ、『グリム童話集』の第七版におけるよりも、初版における方が、より多くの残酷な描写が見られることは確かである。しかしながら、このことを、グリム兄弟に嗜虐趣味があったなどと理解してはならない。彼らが童話において残酷な場面を描写するのは、「勧善懲悪の精神」を説くためのものである。⁽⁷⁾つまり、悪を明確に罰することによって、子どもに「善の勧め」を説くことを目的としている。

ところで、日本における『グリム童話集』の代表的な翻訳を時代順に列挙すると、次の通りである。ただし、ここでは、少なくとも「選集」レベル以上のものだけを対象としている。ここで大いに役立つ文献は、野村滋氏が、「ドイツ文学」第八〇号に掲載している書誌「日本におけるグリム研究文献」である。⁽⁸⁾

- 一、『西洋古事神仙叢話』桐南居士（管子法）訳、集成社、東京一八八七年。
- 二、『八ツ山羊』呉文聰訳、弘文社、東京一八八七年。
- 三、『独逸童話集』橋本青雨訳、大日本国民中学会、東京一九〇六年。
- 四、『家庭お伽噺』和田垣謙三・星野久成訳、小川尚栄堂、東京一九〇九年。
- 五、『グリム御伽話』中島孤島訳、富山房、東京一九一六年。
- 六、『グリム童話集』金田鬼一訳、（第一部）「世界童話大系」第二卷所収、世界童話大系刊行会、東京一九二四年。
（第二部）「世界童話大系」第二三卷所収、世界童話大系刊行会、東京一九二七年。
- 七、『祖稿グリム童話全集』田中梅吉訳、東京堂、東京一九四九年。
- 八、『グリム昔話集』〔全五冊〕関啓吾・川端豊彦訳、角川書店、東京一九五四―六三年。
- 九、『完訳版 グリム童話集』〔全五巻〕「第一巻・矢崎源九郎訳、第二巻・大畑末吉訳、第三巻・植田敏郎訳、第四巻・山室静訳、第五巻・国松孝二訳」偕成社、東京一九五四―五五年。
- 一〇、『学年別おはなし文庫 グリム童話三年生』土屋由岐雄著、偕成社、東京（初版一九五七年）一九九九年。
- 一一、『グリム童話集』〔全三冊〕相良守峯訳、岩波書店、東京一九六六年。
- 一二、『白雪姫』（グリム童話集Ⅰ）、『ヘンゼルとグレーテル』（グリム童話集Ⅱ）、『ブレーメンの音楽師』（グリム童話集Ⅲ）、植田敏郎訳、新潮社、東京一九六七年。
- 一三、『グリム童話全集』〔全三冊〕高橋健二訳、小学館、東京一九七六年。
- 一四、『完訳 グリム童話集』〔全五冊〕金田鬼一訳、岩波書店、東京一九七九年。
- 一五、『読みきかせ グリム名作劇場・二〇話』小学館、東京一九八九年。

一六、『グリム童話』（上・下）池内紀訳、筑摩書房、東京一九九二年。

一七、『子どもに語る グリムの昔話』（全六巻）佐々梨代子・野村滋訳、こぐま社、東京一九九〇—一九九三年。

一八、『グリム童話集』（全四巻）池田香代子訳、講談社、東京一九九五年。

一九、『グリム童話集』リディアポストマ（絵）、ウイルヘルム菊江（訳）、西村書店、新潟一九九五年。

二〇、『完訳 グリム童話——子どもと家庭のメルヒェン集——』（I・II）小澤俊夫訳、ぎょうせい、東京一九九七年。

二一、『初版 グリム童話集』（全四巻）吉原高志・吉原素子訳、白水社、東京一九九七年。

二二、『ベスト・セレクション 初版グリム童話集』吉原高志・吉原素子訳、白水社、東京一九九八年。

二三、『グリム童話』（小学館世界の名作一六）原作／グリム兄弟、監修／西本鶏介、文／乾侑美子、小学館、東京一九九九年。

二四、『こどもと大人のためのメルヘン グリム童話』ポプラ社、東京一九九九年。

二五、『こどもと大人のためのメルヘン グリム童話II』ポプラ社、東京一九九九年。

すでに述べたように、ここでは選集レベル以上のものが列挙されている。しかしながら、日本におけるグリム童話の訳史においては、個別の童話やいくつかの童話の翻訳という形式を採った絵本が最も多いことが、容易に看取される。しかも、これらの童話の物語は、子どもの年齢別に、様々な形で翻案されたものが圧倒的に多数である。この意味において、十番目の翻案は、「学年別おはなし文庫」という条件が付けられている点でも、非常に興味深い。恐らく、さらに詳細なリストを作成してみれば、この種の翻案と、この種の翻案に基づく絵本が、その大多数を占めることは容易に予測される。

従って、このリストからもれている子ども向きの選集・絵本が、これ以外にもかなり存在することはお断りしておかなくてはならない。

筆者の経験によれば、グリム童話をなんらかの形で知っている学生は多いのであるが、しかし、彼らの大半は、絵本・映画等を通じてグリム童話に出会っており、グリム兄弟の『グリム童話集』そのものを通じて知っている学生は、驚くほど少ない。グリム童話は有名であるが、しかし、『グリム童話集』そのものは、案外読者に知られていないのである。

第二節 グリム童話の翻案について

『グリム童話集』は、確かに、本来家庭における子どもばかりではなく、大人のためにも書かれたのであるが、しかし、現代における読者ということになると、やはり、大人よりは子どもの方が圧倒的に多数を占めるであろう。ただし、ここにおいて留意しなければならないことは、これらの子どもたちが読むグリム童話は、大半は翻案になるテキストであるという事実である。

実際、『白雪姫』一つを取ってみても、恐らく『グリム童話集』の中に収められている形での物語が子どもたちによって読まれることは、現代において極めて稀であると思われる。むしろ、それぞれの時代において、それぞれの国の比較的無名の作家、ないし詩人が書き換えたテキストの方が読まれていると言えよう。試みに、幼稚園児向けに書き換えられた『しらゆきひめ』⁽⁹⁾を読んでもみると、グリム童話に見られる反復描写がかなり省略され、継母の三度に互る白雪姫殺害のたぐらみは、毒リンゴ一回に限定されている。また、継母は、焼けた鉄の靴を履かされて処刑されるのではなく、白雪姫を殺す目的で、王子と白雪姫の結婚式へ「まほうのほうき」⁽¹⁰⁾に乗って出かける途中で、雷に当たって死ぬ形を採っている。

恐らく、この描写は、焼けた鉄の靴を履かせて殺すという中世の処刑法が、現代では一般に馴染みのないものとなっているからなのであろう。

この種の翻案は、低年齢層の子どもに向けた絵本では、頻繁に見られるものである。とりわけ、子どもが独りで読むように作られている絵本では、オリジナルなグリム童話は、皆無と言って良いほどに少ない。これも止むを得ないことであるとはいっても、望ましいのは、やはり、おばあさんやおじいさん、あるいはお母さんやお父さんが、ときどき解説を交えながらオリジナルのグリム童話を子どもに読んで聞かせることであろうと思われる。これによって、家庭内における親子の絆も強められるというものである。テレビを見たり、テレビ・ゲーム、あるいは個人的な趣味の追求が主流となっている現代において、親子の交流は、益々少なくなってきた。しかしながら、世代間を繋ぐ親子の交流が減ってきていることは、次世代へ予想以上の悪しき影響を与えると考えられる。子どもは、親を模倣する。とはいえ、そこに全く会話が媒介しないとすれば、子どもは親の外面的態度のみを模倣することとなって、肝腎の精神面は、なかなか模倣できないという結果をもたらすであろう。

第三節 『グリム童話集』の版について

『グリム童話集』と聞くと、なにかしら現在あるような形で、初めから一定数の童話が収録されていたかのような印象を与えるが、しかし、この童話集は、一八二二年に初版第一巻が、続いて一八一五年に初版第二巻が出版されて以来、一八五七年に第七版が出版されるまでに、その童話の収録数ばかりではなく、かなりの童話は、文体上・内容上の修正を施されている。⁽¹¹⁾ それどころか、初版以降削除された童話や新たに追加された童話も少なからず存在している。⁽¹²⁾ ちなみに、初

版以降の収録童話数を列挙すれば、次の通りである。⁽¹³⁾

- | | |
|-------------------------|-----|
| 一、初版（第一卷一八一二年、第二卷一八一五年） | 一五六 |
| 二、第二版（二八一九年） | 一六一 |
| 三、第三版（二八三七年） | 一六八 |
| 四、第四版（二八四〇年） | 一七八 |
| 五、第五版（二八四三年） | 一九四 |
| 六、第六版（二八五〇年） | 二〇〇 |
| 七、第七版（二八五七年） | 二〇〇 |

次に、これまで出版されている『グリム童話集』全訳の中で、現在入手しうる代表的なものを調べてみると、それらは異なった版を用いて訳出していることが分かる。版の種類をその項目の冒頭に明記して、それらの翻訳を列挙すると次の通りである。

- 一、「第七版」、『完訳 グリム童話集〔全五冊〕』金田鬼一訳、岩波書店、東京一九七九年。
- 二、「第七版」、『完訳版 グリム童話集』〔全五冊〕「第一卷・矢崎源九郎訳、第二卷・大畑末吉訳、第三卷・植田敏郎訳、第四卷・山室静訳、第五卷・国松孝二訳」偕成社、東京一九八〇年。
- 三、「第二版」、『完訳 グリム童話——子どもと家庭のメルヒェン集——』〔全二卷〕小澤俊夫訳、ぎょうせい、東京

一九八五年。

- 四、「初版」、『初版 グリム童話集』〔全四巻〕吉原高志・吉原素子訳、白水社、東京一九九七年。
- 五、「第七版」、『グリム昔話集』〔全三冊〕関啓吾・川端豊彦訳、角川書店、東京一九九九年。

ところで、ドイツにおける「ドイツ古典叢書出版社」から出版された『グリム童話集』（一九八五年）は、グリム童話研究の現在生存している研究者の中で、第一人者と言えるハインツ・レレケ教授が編集出版したものである。⁽¹⁴⁾ ここにおいて彼は、第三版に基づいて編集している。ところが、同様に彼が、それ以前に編集出版し、レクラム文庫に収められている『グリム童話集』（全三巻、一九八〇年）は、第七版に基づいている。一般に、研究者にとって、先達の研究者に追随することは、なんとなく憚られることであろう。従って、他の研究者とは違った研究方法ないし研究成果を提出したいという願望は、もつともなことである。しかしながら、『グリム童話集』の編集ないし翻訳に関して異なった版に基づくという研究方法の根底には、奇をてらうこと以上の理由が存在すると思われる。言うまでもなく、「初版」は、「オリジナルのもの」という点で、その存在価値と翻訳価値をもっている。同様に、「第七版」は、「最終の、完全なもの」という点で、その存在価値と翻訳価値をもっている。そうすると、「第二版」と「第三版」は、いかなる存在価値をもつことになるのであろうか。

グリム兄弟が初版を出版したとき、子どもの道徳的教育に拘り定期的にこだわる批判家たちは、『グリム童話集』に見られる残酷な描写や不道徳な描写は、子どもの道徳的教育という点で好ましくないと避難したのであった。この批判は、全面的に正しいものとは言えなかったのであるが、しかし、確かに行き過ぎの観がある描写もあつたのである。そこで、グリム兄弟は、第二版において、家庭内暴力や殺人、近親相姦、性的描写等を部分的に削除したのであつた。

従って、第二版以降において、「あまりにも残酷なもの」は、ほぼその姿を消すこととなったのである。⁽¹⁵⁾

初版第一巻は一八一二年に、そして、初版第二巻は一八一五年に、グリム兄弟がアルニムに勧められたゲオルク・ライマー社から出版された。部数は、九〇〇部であった。第二版は一五〇〇部出版されたが、これも初版同様売れ行きが悪く、一八五六年に再版される段階になっても残部があり、それどころか、一九五〇年に至っても、六マルクで提供されていたと言われる。⁽¹⁶⁾ アルニムの考えによれば、初版の売れ行きが悪かった原因は、第一に「学問的な注釈と序文が添えられていたこと」、第二に「挿絵が欠けていたこと」であった。⁽¹⁷⁾ この忠告に基づいて改訂された第二版の売れ行きも芳しくなかったのであるが、しかし、五〇の童話を選んで同じライマー社から出版された『グリム童話選集』の方は、かなり好調な売れ行きを示したのであった。一五〇〇部出版されたこの選集は、一八二五年以降、一八三三年、一八三六年、一八三九年、一八四一年、一八四三年、一八四四年、その後出版社を変えて、ベルリーンのダウンカー社から一八五〇年、一八五三年、一八五八年と、九回版を重ねている。⁽¹⁸⁾ ある意味では、この『グリム童話選集』の人気によって「グリム童話」は有名になったと言えるのである。

初版および第二版において、グリム兄弟は、その出版謝礼を諦めざるをえなかった。⁽¹⁹⁾ しかし、『グリム童話選集』の好調な売れ行きにもかかわらず、全く謝礼を支払わなかったライマーに不満を覚え、ついに、グリム兄弟は、第三版をゲッティンゲンのデーリヒ社から出版することとなる。グリム兄弟は、一八三七年の「ゲッティンゲン大学七教授追放事件」もあって、なんらかの出版謝礼を期待せざるをえない状況に追い込まれていたと考えられる。しかしながら、『グリム童話集』の出版社を変えたという事態は、『グリム童話集』改訂の過程において、かなり大きな変化を意味していると言わざるをえない。というのも、この三版以降、初めてグリム兄弟は、ブレンターノとアルニムの童話形式から脱皮し、従来の古い民謡の調子を踏まえながら、グリム兄弟独自の童話形式を確立したと考えられるからである。『少年の魔法の

角笛』のもつ「魅力的で、芸術的で、擬古調の」⁽²⁰⁾調子を乗り越えたとき、初めて「グリム童話」が誕生したと言えるであろう。この意味において、第三版は、『グリム童話集』改訂の歴史において、重要な位置を占めている。恐らく、レレケも、この点を重視して、「ドイツ古典叢書」に第三版を収録したと思われる。

第四節 グリム童話八編の新訳

童話の研究方法に関しても、文学研究に関する方法と同様に、主として次のような七つの方法が考えられる。

- 一、作品の構造・文体研究
- 二、作品の歴史と解釈に関する研究
- 三、伝記・書誌学・史料学的研究
- 四、社会学・現実問題の観点からの研究
- 五、芸術・芸術家の観点からの研究
- 六、哲学的観点からの研究
- 七、心理学的・精神分析的観点からの研究

一、二、三の研究方法は別として、四、五、六、七、とりわけ七の研究方法を採る場合には、グリム兄弟が最も心血を注いだ第七版が役立つと考えられる。グリム兄弟が、民衆の間に広まっている童話を、一字一句変えずに、そのまま忠実

に収録したと考えて、『グリム童話集』を民俗学的な資料と見なすとすれば、かなりの幻滅を味わうことになるであろう。というのも、グリム兄弟は、収録した童話をそのまま童話集の中に収めているのではなく、文体を整えたり、不十分な箇所を補ったり、あるいは加筆したりしている。そもそも、彼らは、一つの童話に様々な類話が存在する場合には、それらの類話を比較・検討しながら、一つの一貫した童話に作り上げているのである。この意味において、グリム童話は、確かに「民俗童話」ではあるものの、部分的にはグリム兄弟の「創作童話」であるという局面ももっているのである。

童話の解釈に際しては、通常の文学作品、とりわけ短編小説や長編小説と違って、一つ一つの単語のもつイメージとシンボルが重要な役割を果たすゆえに、他人の翻訳に基づいた場合、大きな誤解が生ずる可能性が大である。それにまた、翻訳というものは、そもそも、なんらかの意味において、訳者の「思い入れ」が大きく反映しているものである。ところが、その「思い入れ」が、逆に、童話の解釈の大きな妨げとなりかねないのである。従って、童話の解釈者は、必然的に、まずは自分なりの翻訳を試みなければならない。

様々な年齢層に向けられて出版される童話の翻訳、あるいは翻案についても、種々の観点から論ぜられねばならぬであろう。しかし、このことは、今後の研究のテーマとし、ここでは取り敢えず、今回の翻訳の指針を次に掲げるだけにしておきたい。

- 一、翻訳の底本としては、「ドイツ古典叢書」に収められている『子どもと家庭のための童話』（第三版）を用いた。
- 二、「段落」の形式は、第三版における形式を踏襲した。
- 三、漢字は、すべて「ルビ」を付して、使用した。
- 四、翻訳は、極力原文から離れないように努めた。

五、「韻」を踏んでいる個所に関しては、そのニュアンスが看取されるように訳出した。最後に、筆者がこれまで深層心理学的解釈を試みた童話の翻訳を提示する。

グリム童話八編

グリム兄弟・作

梅内 幸信・訳

『蛙の王さま』（別称、『鉄のハインリヒ』KHM II）

むかしむかし、人の願いがまだかなえられたころのこと、一人の王さまが住んでおりました。王さまにはお姫さまがいて、どのお姫さまも美しかったのですが、わけても末のお姫さまがとて美しく、大勢の美女を見てきたお天道さまさえ、このお姫さまのお顔を照らすたびに、どうしてこんなに美しいものかと不思議に思うほどでした。王さまのお城のそばに、うっそうと繁った大きな森がありました。そして、森の中の年をとった古い菩提樹の下に、泉がわいていました。とても暑い日には、お姫さまは森に入って、すずしい泉のほとりに座りました。そして、退屈したときには、金のマリを出して、それを高くほうり投げては、落ちて来るのを受けとめていました。それが、お姫さまの大好きな遊びでした。

ある日のこと、この金のマリが、受け止めようとのばしていたお姫さまのかわいい手をそれで、地面に落ち、そのまままっすぐ泉の水の中へころげ落ちてしまいました。お姫さまは、泉をのぞきこんで金のマリを探しましたが、金のマリは影も形も見えません。泉は深く、底も見えないくらいでした。悲しくなったお姫さまは、泣きだしてしまいました。

ますます大きな声で泣きましたが、そうしたところで少しも慰められませんでした。こうして、お姫さまが泣き悲しんでいると、だれかが呼びかける声がありました。「どうしたんだい、お姫さん、まったく石ころでさえ憐れみたくなくなるに泣いてるね。」どこからその声がしているのかと、お姫さまがあたりを見回すと、一匹の蛙が目にとまりました。その蛙は、ぼてぼての醜い頭を水面からつきだしていました。「あら、ピチパチャの蛙くんじゃない」と、お姫さまは言いました。「あたしが泣いているのはね、あたしの金のマリが泉の中へ沈んでしまったからなの。」「泣くのはやめなよ」と、蛙が言いました。「ぼくがきつといい方法を見つかるからさ。でも、ぼくがあんたのマリを取りもどしたら、お姫さんはほくになにをくれるんだい。」お姫さまは、言いました。「蛙くんの欲しいものならなんでもあげるわ、あたしの服だって、真珠だって、寶石だってね。それに、あたしの頭にのっけてる金のかんむりだって。」すると、蛙は言いました。「あんたの服も、真珠や宝石も、金のかんむりも、ぼくはいらないよ。でも、ぼくを好きになつてくれて、ぼくを仲間に入れて、遊び友だちにして、食事のときあんたのとなりに座らせて、あんたの金の皿で食べさせて、あんたのコップで飲ませて、あんたのベッドで寝させてもらえるのを約束してくれるのだったら、ぼくは金のマリを水の底からもって来てやるよ。」「いいわよ」と、お姫さまは言いました。「なんでも約束するわ、あんたが金のマリを取って来てくれさえすればね。」しかし、お姫さまは、心の中では、こう考えていました。「ばかな蛙のおしゃべりじゃない。蛙は、水の中で似たものどうしで、グアグア鳴いていりやいのよ、どうせ人間の仲間になんかなれっこないわ。」

約束を受けると、蛙は頭を水の中に沈めて、下の方へもぐって行きました。それからしばらくして、蛙は水をかきわけ浮かんで来ました。蛙は、口にマリをくわえていて、それを草の中へほうりだしました。お姫さまは、自分の美しい金のマリを再び目にするのと、大喜びで、マリを拾い上げ、それをもってさっさと走りだしました。「待つて、待つてよ」と、蛙は叫びました。「ぼくもいっしょにつれてってよ。ぼくは、あんたみたいに早く走れないんだから。」しか

し、グアグアと、お姫さまのうしろから声のかぎり叫んでも、むだでした。お姫さまは、蛙の声を聞こうともしないで、急いでお城に帰り、すぐに、かわいいそうな蛙のことなど忘れてしまいました。そこで蛙は、しかたなくまた深い水の中におりて行かなければなりませんでした。

次の日のこと、お姫さまが、王さまや並いる大臣たちと食卓について、金の皿で食べていると、ピチパチャ、ピチパチャと、なにやら大理石の階段をはい上がって来るものがありました。そして、上に着くと、それはドアをたたいて、叫びました。「お姫さーん、末のお姫さーん、ドアをあけてよ。」お姫さまは、だれが外にいるのか見ようと思つて、かけてドアをあけると、そこにいたのはあの蛙だったので。お姫さまは、あわててドアをボタンとして、再び食卓につきましたが、とても心配でなりません。王さまは、お姫さまの胸が激しくドキドキ鳴っているのが分かりましたので、こう言いました。「おい、おまえ、なにをこわがっているんだね。ドアの外に大男でもいて、おまえをさらつてゆこうとでもいうのかね。」「いいえ、大男などではありません」と、お姫さまは言いました。「大男ではなくて、むかつくような蛙なの。あたし、きのう森であたしの金のマリを水の中から取つて来てくれたら、あの蛙を仲間に入れてあげるって、あの蛙と約束したの。でも、あたし、あの蛙が水の中から出て来るなんて、ちつとも考えなかつたわ。なのに、あの蛙は、今ドアの外に来ていて、中に入つて、あたしのところにごようとしてるんです。」そのとき、またドアをたたたく音がして、叫び声が聞こえました。

「お姫さーん、末のお姫さーん、

ドアをあけてよ、

きのうぼくに言ったこと、

あんたは忘れたの。

すずしい泉の水のほとりで言ったことをさ。

お姫さん、末のお姫さん、

ドアをあけてよ。」

すると、王さまは言いました。「約束をしたのなら、やはり守らなきやならんよ。行つて、ドアをあけてあげなさい。」お姫さまが行つて、ドアをあけると、蛙がピョンピョンはねて中に入り、お姫さまの歩く後を追いかけて、イスのところにまでやつて来ました。蛙はそこでとまって、叫びました。「ぼくをあんたのそばに上げてよ。」お姫さまは、そうしてあげようとはしなかつたので、とうとう王さまが、そうするよう命じました。蛙はイスの上にとると、こう言いました。「さあ、あんたの金の皿を、もっとぼくの方に近づけてよ。ぼくたちが、いっしょに食べられるようにね。」お姫さまは、そうしてあげましたが、しかし、いやいやながらそうしていることは、ほかのだれの目にもちゃんと分かりました。蛙はたらふく食べましたが、お姫さまの方は、ほとんど一口も満足にのどを通りませんでした。そして、最後に、蛙は言いました。「もうぼくは満腹して、疲れたから、ぼくを上にあるあんたの寝室へつれてつて、絹のベッドを整えてよ。そうして、いっしょに寝ようよ。」すると、お姫さまは、泣きだしてしまいました。冷酷な蛙がこわかつたのです。それに、さわるのもいやなのに、今度は、自分の美しくてきれいなベッドに寝かしてあげなければならぬからです。しかし、王さまは、怒った目つきでお姫さまをにらんで、こう言いました。「約束したことは、ちゃんと守らにやならん。蛙は、おまえの仲間なんだから。」お姫さまが、いやだと言いはつてみても、むだなことでした。蛙をいっしょにつれて行かなくてはなりませんでした。それで、お姫さまは、すっかり怒つてしまい、二本指で蛙をつまんで、上へつれて行きまし

た。そして、お姫さまはベッドに入ると、蛙をベッドの中に入れる代わりに、蛙を思いつきり壁にたたきつけて、こう言いました。「これでゆつくり休めるでしょ、このいやらしい蛙め。」

ところが、下に落ちたものは、死に蛙ではなく、やさしくてすてきな目の、生きている若い王子さまでした。王子さまは、法律によつても、父親によつても認められましたので、お姫さまの愛する友だちとなり、ご主人さまとなりました。こうして、二人は満足して一緒に眠りました。次の日の朝、陽の光で二人の目がさめると、白馬八頭立の馬車が一台やつて来ました。どの馬の頭もダチヨウの羽で飾られ、馬は金の鎖でつながれていました。馬車のうしろには、若い王さまの召使いが立っておりました。これが、若い王さまの忠実な家来、忠臣ハインリヒでした。忠臣ハインリヒは、ご主人さまが蛙に変えられたとき、ひどく悲しんで、その悲しみのあまり、胸がち切れないようにと、胸のまわりに鉄のタガを三本はめさせなければなりません。けれども、この馬車は、若い王さまを国へおつれする馬車なのです。忠臣ハインリヒは、お二人を馬車の中へ乗せ、そして、再び馬車のうしろに立ちました。ハインリヒの心は、王さまが救われた喜びでいっぱいになりました。馬車がしばらく進むと、王子さまは、うしろの方でなにかがはじけ飛ぶような、破裂する音を聞きました。そこで、王子さまはふり向いて、声をかけました。

「ハインリヒ、馬車がこわれるぞ。」

「いいえ、ご主人さま、馬車ではござりませぬぞ。」

ご主人さまが蛙に変えられて、

ご主人さまが泉の中におられて、

私の胸は大きな苦しみに満たされたのでございました。

そのとき、胸がはじけぬようにとはめたタガの、はち切れる音でございました。」

もう一度、さらにもう一度と、途中で破裂する音がしました。そのたびに王子さまは、馬車がこわれるのではないかと思われました。けれどもそれは、自分のご主人さまが救われ幸せになられたという喜びのあまり、忠臣ハインリヒが胸にはめたタガのはち切れる音にすぎませんでした。

『灰かぶり』(KHM二一)

ある金持ちの男がおりましたが、その妻が病氣になりました。妻は、自分の死が近づいたことを感じると、一人娘を自分の枕もとに呼んで、こう言いました。「ねえ、おまえ、どんなときでも神さまを信じて、いい子にしているんだよ。そうすれば、神さまは、いつでもおまえを助けてくださるだろうし、母さんも、天国からおまえを見守って、おまえのそばについてあげようよ。」そう言って、お母さんは目をとじて、亡くなりました。娘は、毎日お母さんのお墓に行って泣きました。そして、神さまを信じ、いい子にしておりました。でも、冬がきて、雪が白い布のように、お墓をおおいました。やがて、春がきて、再びその布を取り去ると、その金持ちは、別の妻を迎えました。

その妻は、二人の娘をつれて来ました。つれ子たちは、顔は白くてきれいでしたが、逆に、心の中は汚れて真っ黒でした。ですから、かわいそうなまま子にとっては、つらい日々が始まりました。「なんてやつが部屋にいるんだい」と、ママ母とつれ子たちは言いました。「ご飯を食べたかったら、だれだって自分でかせぐんだよ。料理女は出て行け。」こ

う言うのと、三人は、娘の着ていたきれいな着物をはぎ取って、灰色の古ぼけたうわっぱりを着せ、ばかにしながらはやしたて、娘を台所へつれて行きました。そこで、娘は、とてもつらい仕事をしなければなりません。朝は日の出前に起きて、水を運び、火をおこして、煮炊きをし、洗濯をしなければなりません。おまけに、このお姉さんたちは、ありとあらゆるいじわるを考えだしては、娘をいじめたり、ののしつたりするのでした。また、お姉さんたちは、えんどう豆やひら豆を灰の中へぶちまけるので、娘は座ったままで、豆を拾いださなければなりません。晩になつて、さんざん働いて疲きつても、娘は寢床ではなく、かまどのそばの灰の中で眠らなければなりません。それで、娘は、いつもほりまみれで、汚れて見えたので、まま母とつれ子たちは、この娘を「灰かぶり」と呼びました。

ある日のこと、お父さんが市へ出かけることになりました。そこで、お父さんは、二人のつれ子たちに、おみやげになが欲しいかとたずねました。「きれいな着物をね」と、一人のつれ子が言うのと、もう一人のつれ子は、「真珠と宝石をね」と言いしました。「ところで、灰かぶり、おまえはなが欲しいんだい」と、お父さんはたずねました。「お父さん、お帰りのとき、お父さんの帽子にあたった最初の小枝を、折って来てちょうだいね」と、灰かぶりは言いました。さて、お父さんは、二人のつれ子たちのおみやげに、きれいな着物と、真珠と宝石を買いました。そして、帰り道で、青青とした木のしげみを通つたとき、ハシバミの木の小枝がお父さんにふれて、帽子が落ちてしまいました。そこで、お父さんは、その小枝を折って、それをもち帰りました。家に帰ると、お父さんは、つれ子たちには望みの品品をあげ、灰かぶりにはハシバミの小枝をあげました。灰かぶりは、お父さんにお礼を言い、お母さんのお墓へ行つて、その小枝をお墓の上へ植えました。そして、そこでおいおい泣きましたので、その涙で、お墓は、水がまかれたようになってしまいました。やがて、その小枝は大きくなつて、りっぱな木になりました。灰かぶりは、毎日三度その木の下へ行つて、泣いてはお祈り

をしました。すると、そのたびに、一羽の小鳥が木の上に来て、灰かぶりが望むものを、なんでも落としてくれるのでした。

ところが、あるとき、王子さまが宴会を開くことになりました。この宴会は、王子さまが花嫁を探すために、三日間続くことになっておりました。二人のつれ子たちも、この宴会に招かれておりました。二人は、灰かぶりを呼んで、こう言いつけました。「あたしたちの髪をとかして、靴をみがいて、それから、腰の留め金をきつくしめておくれ。あたしたちは、王子さまの宴会で踊るんだからね。」灰かぶりは、言われるままにしましたが、つい泣いてしまいました。というのも、灰かぶりもいっしょに行つて、踊りたかつたからです。そこで、行くのを許して欲しいと、灰かぶりはけんめいにお願ひしました。でも、ママ母は、「いいかい、灰かぶり、おまえは、身につけるものも、着るものもないし、踊れもしないのに、宴会の席に出ようって言うのかい！」と言いました。灰かぶりが、続けてお願ひをすると、とうとうママ母は、こう言いました。「それじゃ、どんぶり一杯のひら豆をおちまけてあるから、それを二時間で、もと通り拾い集めな。そしてら、いっしょにつれて行つてあげるよ。」娘は、裏戸から庭へ出て、こう叫びました。「ねえ、家バトちゃん、山バトちゃん、お空の下の小鳥たち、みいーんなここへやって来て、あたしの豆拾い手伝つてえー、

いいお豆は、お鍋の中へ、

悪いお豆は、餌袋の中へ。」

すると、台所の窓から、二羽の白い小バトが入つて来ました。これに続いて、山バトが入つて来ると、しまいには空の下にいる小鳥が、バタバタと群れをなして、残らず入つて来て、灰のまわりに降りました。そうして、小バトたちは、

頭あたまを上げ下げさして、コツ、コツ、コツと、つつつき始めはじめました。そこで、ほかの小鳥こどりたちも、コツ、コツ、コツ、コツと、つつつき始めはじめました。やがて、いい豆まめを残のこらずどんぶりの中なかへ拾ひろい集あつめました。一時間いちじかんとたたないうちに、小鳥こどりたちは、もう仕事しごとを片付かたづけて、また残のこらず、飛とんで行ゆきました。そこで、娘むすめは、豆まめの入はいったどんぶりをママ母ははのところへもつて行ゆきました。これでいっしょに宴会えんかいへ行ゆけると思おもうと、灰はいかぶりはうれしくなりました。ところが、ママ母ははは、こう言いいました。「だめだよ、灰はいかぶり、おまえには着物きものがないし、おまえは踊おどれやしない。いっしょにつれて行ゆけないよ。」これを聞きいて、灰はいかぶりが泣なきだすと、ママ母ははは、こう言いいました。「どんぶり二杯にはいぶん分のひら豆まめを、灰はいの中なかからちやんと拾ひろいだすことができたら、いっしょにつれてつてあげるよ。」ところが、頭あたまの中なかでは、「そんなこと、できっこないさ」と考かんがえていました。こうして、ママ母ははは、どんぶり二杯にはいのひら豆まめを、灰はいの中なかへぶちまけました。でも、娘むすめは、裏戸うらどから庭にわに出でて、こう叫さけびました。「ねえ、家バトいえちやーん、山バトやまちやーん、お空そらの下したの小鳥こどりたちー、みいーんなここへやつて来きて、あたしの豆拾まめひろい手伝てつたってえー、

いいお豆まめは、お鍋なべの中なかへ、
悪いお豆わるまめは、餌袋えぶくろの中なかへ。」

すると、台所だいどころの窓まどから、二羽にわの白しろい小バトこが入はいって来きました。これに続つづいて、山バトやまが入はいって来くると、しまいには空そらの下したにいる小鳥こどりが、バタバタと群むれをなして、残のこらず入はいって来きて、灰はいのまわりに降おりました。そうして、小バトこたちは、頭あたまを上げ下げさして、コツ、コツ、コツと、つつつき始めはじめました。そこで、ほかの小鳥こどりたちも、コツ、コツ、コツ、コツと、つつつき始めはじめました。やがて、いい豆まめを残のこらずどんぶりの中なかへ拾ひろい集あつめました。こうして、三十分さんじゅうぶんとたたない

うちに、小鳥たちは、もう仕事を片付けて、また残らず外へ飛んで行ってしまいました。そこで、娘は、どんぶりをま
ま母のところへもって行きました。そして、灰かぶりは、これでいっしょに宴会へ行けると思つて、うれしくなりました。
ところが、ママ母は、こう言いました。「なにをしたつて、だめなんだよ、おまえはね。おまえは、いっしょに行けない
よ。着物ももつてないし、踊れないしね。あたしたちが、恥かくだけの話だよ。」こう言うと、ママ母は、つれ子姉妹を
つれて、出かけてしまいました。

家にもうだれもいなくなると、灰かぶりは、お母さんのお墓に行つて、こう呼びかけました。

「ハシバミちゃん、ゆらゆらぐらぐら体をゆさぶつてね、

あたしに金と銀を落としてね。」

すると、いつもの鳥が金と銀の糸で織つた着物と、絹と銀の糸で刺しゅうをほどこした上靴を落としてくれました。
娘は、その着物を着て、宴会へ出かけました。つれ子姉妹やママ母は、それが灰かぶりだとは分からずに、どこかよそ
の国の王女に違いないと考へていました。豪華な衣装を身につけると、灰かぶりは、それほど美しく見えたのでした。
三人は、それが灰かぶりだとは夢にも思いませんでした。灰かぶりは、今ごろ家について、ごみにまみれていると考へて
いました。王子さまは、灰かぶりを迎えると、手を取つて、灰かぶりと踊り始めました。王子さまは、ほかの人とは踊
ろうとせず、灰かぶりの手を離そうとしませんでした。だれかほかの人が来て、灰かぶりと踊ろうとすると、王子さまは、
「この人は、ぼくのお相手だよ」と言いました。

王子さまは、日が暮れるまで踊りました。日が暮れると、灰かぶりは、家へ帰ろうとしました。ところが、王子さまは、

「ぼくが送ってあげよう」と言いました。それというのも、王子さまは、その美しい娘が、どこの娘なのか知れたからです。でも、灰かぶりは、王子さまの目からうまくなされて、ハト小屋の中へ跳びこみました。さて、王子さまが待っていますと、灰かぶりの父親が帰って来ました。そこで、王子さまは、父親に、「よその娘が、ハト小屋の中へ跳びこんだのだが」と言いました。すると、父親は、「灰かぶりじゃあるまいな」と考えましたので、まま母とつれ子たちに斧と鉋をもってこさせて、ハト小屋を真つ二つにこわしました。でも、中にはだれもおりませんでした。そこで、家の者たちが中へ入ると、灰かぶりが汚れた着物を着て、灰の中に寝ころんでいました。そして、小さなランプのぼんやりとした光が、煙突の中にもつていました。それというのも、灰かぶりは、すばやくハト小屋を通りぬけて、ハシバミの木のところへ行っていたからでした。そこで、灰かぶりは、きれいな着物をぬいで、それをお墓の上へかけました。すると、いつもの鳥が、その着物をまた運び去ってしまいましたので、灰かぶりは、灰色のうわっぱりを着て、台所の灰の中へもぐりこんでしまっていたのでした。

次の日、宴会が新しく始まると、お父さんお母さんとつれ子たちは、再び出かけました。灰かぶりは、ハシバミの木のところへ行つて、こう呼びかけました。

「ハシバミちゃん、ゆらゆらぐらぐら体をゆさぶってね、

あたしに金と銀を落としてね。」

すると、いつもの鳥が、前の日よりももっと豪華な着物を落としてくれました。灰かぶりが、この着物を着て宴会に現れると、だれもかれもが、その美しさに驚いてしまいました。ところが、王子さまは、灰かぶりが来るのをずっと

待っていましたので、灰かぶりが来ると、すぐにその手を取って、灰かぶり一人だけと踊りました。ほかの者たちが来て、灰かぶりに踊りのお相手を求めると、王子さまは、「この人は、ぼくのお相手だよ」と言いました。そうして、日が暮れましたので、灰かぶりは家へ帰ろうとしました。すると、王子さまは、いっしょについて行って、どの家に入るか見ようとなりました。ところが、灰かぶりは、王子さまのそばからのがれて、家のうしろの庭の中へ跳びこみました。庭には、りっぱで大きなナシの木が一本生えていて、みごとな実がたくさんなっていました。灰かぶりは、このナシの木に、すばしっこくよじ登りましたので、王子さまは、灰かぶりがどこへ行ったのやら、分からなくなりました。ところが、王子さまが、待っていると、父親が帰って来ましたので、父親にこう言いました。「よその娘が、ぼくのそばから逃げて、あのナシの木の上によじ登ったと思うんだが。」父親は、「灰かぶりじゃあるまいな」と考えたものですから、家の者に斧をもつてこさせると、ナシの木を切りたおしてしまいました。ところが、木の上には、だれもおりませんでした。そうして、家の者たちが台所に入ると、灰かぶりは、いつものように、灰の中に寝ころんでいました。それというのも、灰かぶりは、ナシの木の反対がわから跳びおりて、ハシバミの木の上にいるいつもの鳥に美しい衣装を返して、自分の灰色のうわっぱりを着てしまっていたからなのです。

三日目に、お父さんとお母さん、つれ子姉妹たちが出かけると、灰かぶりは、またお母さんのお墓に行つて、ハシバミの木に向かつて、こう呼びかけました。

「ハシバミちゃん、ゆらゆらぐらぐら体をゆさぶつてね、

あたしに金と銀を落としてね。」

すると、いつもの鳥は、一枚の着物を落としてくれましたが、それは灰かぶりが、これまで身につけたどの着物よりも豪華なものでした。上靴は、全部金でできていました。灰かぶりが宴会に現れると、なみいる人人は、驚きのあまり、言うことばありませんでした。王子さまは、初めから終わりまで、灰かぶり一人だけと踊りました。灰かぶりを踊りのお相手に求める人がいると、王子さまは、「この人は、ほくのお相手だよ」と言いました。

さて、日が暮れると、灰かぶりは、家に帰ろうとしました。王子さまは、おともをするつもりでしたが、灰かぶりは、王子さまのもとから逃げてしまいました。ところが、灰かぶりは、全部金でできた上靴の左の方をなくしてしまいました。それというのも、王子さまが、階段の上になべねばしたコルタールをぬらせておいたからです。それで、左の方の靴は、コルタールにくつついて離れなかつたのです。

王子さまは、その靴を取り、次の日、その靴をもつて、金持ちの男のところへ行つて、この金の靴に足の合うひとを妻に迎えたい、と言いました。そこで、二人のつれ子姉妹たちは、喜びました。それというのも、二人はきれいな足をしていたからです。姉が靴をもつて、次の間に入つて、はいてみようと思いました。まま母も、そこについて行きました。ところが、足の指が大きくて、どうしても足が入りません。それに、その靴が小さすぎたのです。そこで、まま母は、娘に包丁をわたして、「足の指なんか、切りなさい。お妃になれば、足で歩く必要もないんだから」と言いました。娘は、足の指を切り落として、足をむりやりおしこんで、王子さまのところへ行きました。王子さまは、娘を花嫁として馬に乗せ、いっしょに出かけました。ところが、二人は、あのお墓のそばを通らなければなりません。そこに来ると、二羽の小バトが、ハシバミの木の上にとまっています、こう呼びかけました。

「ふりかえって、ふりかえって、見てごらん、

靴くつの中なかには血ちがいつぱい、見てごらん、

靴くつが小ちいさすぎるのさ、

ほんとの嫁よめさんは、まだおうちのなかの中なかなのさ。」

それで、王子おうじさまは、娘むすめの足あしを見ると、血ちがあふれでているのが見みえました。王子おうじさまは、馬うまの向むきをかえて、にせの花嫁はなよめを花嫁はなよめの家いえへつれもどしました。そうして、「この娘むすめは、ほんとの花嫁はなよめでないの、もう一人ひとりの娘むすめに靴くつをはかせたい」と、王子おうじさまは言いいました。そこで、妹いもうとの方が、次つぎの間まに入はいりました。足あしの指ゆびは、靴くつの中なかに入はいりましたが、ところが、今度こんどは、かかとおおきすぎました。すると、ママ母ははは、娘むすめに包丁ほうちようをわたして、こう言いいました。「かかとおを、ちよつと切きりなさい。お妃おきさきになれば、足あしで歩あるく必要ひつようもないんだから。」娘むすめは、かかとおをちよつと切きって、むりやり足あしを靴くつの中なかへおしこんで、部屋へやから出でて、王子おうじさまのところへ行ゆきました。王子おうじさまは、娘むすめを花嫁はなよめとして馬うまに乗のせ、いっしょに出でかけました。二人ふたりが、ハシバミの木きのそばを通とおりかかると、その木きの上うえに二羽にわの小バトこがとまっていて、こう呼よびかけました。

「ふりかえって、ふりかえって、見みてごらん、

靴くつの中なかには血ちがいつぱい、見みてごらん、

靴くつが小ちいさすぎるのさ、

ほんとの嫁よめさんは、まだおうちのなかの中なかなのさ。」

王子さまが娘の足を見おろすと、血が靴からあふれでて、白い靴下が上の方まで真っ赤にそまっているのが見えました。そこで、王子さまは、馬の向きをかえ、にせの花嫁を花嫁の家へつれもしました。王子さまは、「この娘も、ほんとの花嫁ではない。もうほかに娘はおらんのかね」とたずねました。「おりません」と、金持ちの男は答えました。「もつとも、亡くなりました手前の家内ののこしました小さくて、灰だらけのきたない娘がおるにはおるのでございますが、あれは王子さまの花嫁になどなれるものではありません。」王子さまは、「その娘をここへつれて来て欲しい」と言いました。ところが、母親は、「まあ、とんでもございませぬ。あれは、きたなすぎまして、人前など出せるものではございませぬ」と答えました。それでも、王子さまは、なにがなんでも会いたいと言いはりましたので、灰かぶりが呼びだされることになりました。そこで、灰かぶりは、手と頭をきれいに洗い、そうして、王子さまのところへ行つて、王子さまの前でおじぎをしました。すると、王子さまは、灰かぶりに金の靴を手渡しました。そこで、灰かぶりは、左足の重たい木靴を脱いで、左足を金の靴に入れてみました。すると、足は靴の中に、まるで灰かぶりに合わせて作つてあるかのように、ぴったりとおさまりました。灰かぶりが立ちあがると、王子さまは、「この人が、ほんとの花嫁だ！」と言いました。ママ母とつれ子姉妹は、びっくりしてしまい、腹立ちのあまり、真っ青になりました。ところが、王子さまは、灰かぶりを馬に乗せ、いっしょに出かけました。二人が、ハシバミの木のをそばを通りかかると、二羽の白い小バトが、こう呼びかけました。

「ふりかえつて、ふりかえつて、見てごらん、

靴の中には、血はあふれてない、見てごらん、
靴はぴったりなのさ、

ほんとの嫁さんを、おうちへつれ帰るのさ。」

小バトたちは、こう呼びかけると、二羽とも舞い降りて来て、灰かぶりの肩の上にとまりました。一羽は右肩に、もう一羽は左肩にとまったままでおりました。

王子さまとの婚礼の式があげられる段になると、にせの姉妹たちは、おせじを言つて、灰かぶりの幸せを分けてもらおうと考えて、やつて来ました。そうして、花嫁と花婿が教会へやつて来ると、姉の方は右側に、妹の方は左側につきそいました。すると、ハトたちは、二人の目玉を一つずつ、つつきだしました。そのあと、花嫁と花婿が教会から出て来たとき、姉の方は左側に、妹の方は右側につきそっていました。すると、ハトたちは、二人のもう一方の目玉もつつきだしました。こうして、二人の姉妹は、いじわるをしたり、にせの花嫁になつたりしたそのばちがあたつて、一生めくらで暮らさなければなりませんでした。

『ホレばあさん』(KHM二四)

ある後家さんに、二人の娘がありました。一人は、きりようよしの働き者で、もう一人は、きりようの悪いなまけ者でした。ところが、この後家さんは、きりようの悪いなまけ者が自分の本当の娘なものですから、こっちの娘の方を、ずっとかわいがりました。そこで、もう一人の娘は、家の仕事をなんでもおしつけられ、ごみまみれ、灰まみれになつて働かなくてはなりませんでした。このかわいそうな娘は、毎日大通りに出て、井戸のそばに座つて、たくさんの糸を

つむがなくてはなりませんので、指から血が流れでてくるほどでした。さて、ある日のこと、糸巻が、すっかり血だらけになってしまいましたので、娘は、井戸にかがみこんで、糸巻を洗って、きれいにしようと思いましたが、糸巻は、手からすべって、井戸の中へ落ちてしまいました。娘は、泣きながら、ママ母のところへかけて行って、自分のおかした失敗を話しました。すると、ママ母は、娘をひどくしかりつけて、その上、なさけようしやなく、こう言いました。「おまえが糸巻を落としたんだから、おまえがまた、自分で取ってくりやいいじゃないか。」そこで、娘は、井戸のところへもどりましたが、どうしたら良いのか分かりませんでした。とうとう、娘は、心配のあまり、糸巻を取りもどそうと、井戸の中へ飛びこんでしまいました。娘が目をさまして、再びわれにかえると、娘は、美しい野原の上において、そこではお日さまが輝き、何千もの花花が咲いていました。野原を進んで行くと、娘は、パン焼きがまのところに出了ました。パン焼きがまは、パンでいっぱいでした。すると、パンがこう呼びかけました。「お願いだから、ぼくを引っぱりだして、引っぱりだしてよおー！ でないと、ぼくこげちゃうよ！ ぼく、もうとつくのむかしに焼けているんだよー！」そこで、娘は、急いでそこへかけよって、パンを一つ残らず、外へ出してやりました。そのあとで、さらに進んで行くと、一本の木のところへ出了ました。その木には、リンゴがたくさんなっていて、その木は、娘に向かって、こう呼びかけました。「お願い、あたしをゆさぶって、ゆさぶってちょうだい！ リンゴは、みんな熟しているのよ！」そこで、娘は、その木をゆさぶりました。すると、リンゴは、雨あられのように降ってきて、とうとうリンゴは、木に一つもなくなっていました。それから、娘は、また先へと進みました。やっとのことで、娘は、一軒の小さな家のところに出ました。家の中から、一人のおばあさんが外をのぞいていました。そのおばあさんは、とても大きな歯をしていましたので、娘はこわくなって、逃げだそうとしました。ところが、おばあさんは、娘のうしろから、こう呼びかけました。「こわがるんじゃないよ、お嬢ちゃん！ あたしのところへおいで！ もし、あんたがね、うちの仕事をなんで

もきちんとやってくれるつもりならばね、あんたを幸せにしてあげるよ。ただね、あたしのベッドをきちんとなおして、フトンをよくふって、その羽が舞うようにしてくれりやいいんだよ。そうすりや、人間の世界じゃ雪が降るのさ。あたしや、ホレばあさんって言うのさ。」おばあさんは、とても親切なことをばをかけてくれたので、娘は、申し出を受けて、ホレばあさんに奉公することにしました。娘は、どんな仕事でも、ホレばあさんの気のように片付けました。娘は、ホレばあさんのフトンを、いつも力いっぱいふるいました。こうして、娘は、ホレばあさんのところで、しかられることもなく、毎日、煮物や焼き物を食べて、楽しく暮らしました。さて、こうして、しばらくホレばあさんのところで暮らしておりましたが、やがて、娘は、悲しくなってきました。ここにいる方が、自分の家にいるよりも、何千倍も幸せか知れないのですが、娘はそれでも自分の家に帰りたくてしかたがありませんでした。とうとう、娘は、ホレばあさんに言いました。「あたし、うちが恋しくなってきました。ここにいれば幸せなのは分かっていますけど、もうこれいじょうここにはいられません。」すると、ホレばあさんは言いました。「おうちが恋しくなつたとは、うれしいことだねえ。あんたはね、あたしによく奉公してくれたから、あたしや、あんたを自分で上へつれてあげよう。」こう言うと、ホレばあさんは、娘の手を取って、とある大きな門の前へつれて行きました。門があげられて、娘がちょうど門の真下にやってくると、ドオーと、金の雨が降ってきました。その金の雨が、残らず娘の体にまとわりつきましたので、娘は、頭のとっぺんからつま先まで、金でおおわれてしまいました。「それは、あんたにあげるよ。あんたは、本当によく働いてくれたからねえ」と、ホレばあさんは言って、娘に、むかし井戸に落とされた糸巻を返してくれました。このあと、門がとじられると、娘は、上にある人間の世界にきていました。それも、お母さんの家から遠くないところにきていました。そして、娘が家の中の庭へ入っていると、井戸の上にとまっていたオンドリが、こう鳴きました。

「コケコッコオー、

うちの金のお嬢ちゃんのお帰りがよおー。」

娘は、家の中へ入って、お母さんのところへ行きました。すると、娘は、全身金づくめでやって来たものですから、大喜びで迎え入れられました。

お母さんは、娘がどのようにして金持ちになったかという話を聞くと、もう一人のきりよりの悪いなまけ者の娘に、なんと同じ幸せを手に入れさせてあげたいと思いました。そこで悪い子も、井戸のそばに座って、糸をつむぐことになりました。糸巻を血だらけにするために、悪い子は、自分で自分の指をつき刺したり、手をイバラの垣根につっこんで、ひっかき傷を作ったりしました。そうしておいて、悪い子は、糸巻を井戸の中へほうりこみ、自分もその中に飛びこみました。悪い子も、良い子と同じように、美しい野原に出て、同じ道を進んで行きました。悪い子は、パン焼きがまにたどり着くと、パンが、またしても、「お願いだから、ぼくを引っぱりだして、引っぱりだしてよおー！ でないと、ぼくこげちゃうよ！ ぼく、もうとつくのむかしに焼けているんだよー！」と叫びました。ところが、なまけ者の悪い子は、「あたし、体を汚したくないわ」と答えて、そこを立ち去りました。やがて、悪い子は、リンゴの木のところへやって来ると、リンゴの木は、「お願い、あたしをゆさぶって、ゆさぶってちょうだい！ リンゴは、みんなできちやっっているのよ！」と呼びかけました。でも、悪い子は、「あんたには、用はないわ！ リンゴが、あたしの頭に落ちてきたら、どうすんのよ！」と言って、そのまま先に進んで行きました。ホレばあさんの家の前へやって来たとき、悪い子は、ホレばあさんの大きな歯については聞き知っていましたが、こわがらず、すぐさま奉公することになりました。最初の日、悪い子は、自分をむりにおし殺して、ホレばあさんの言うがまま、けんめいに働きました。それというのも、悪い子は、ホ

レばあさんが自分じぶんにくれるたくさんのお金かねのことで頭あたまがいっぱいだったからです。ところが、二日目ふつかめにはもう、悪い子わるこは、なまけだし、三日目みつかめには、もっとひどくなつて、朝あさになつても、ぜんぜん起きおきようともしませんでした。悪い子わるこは、ホレばあさんのベッドをととの整ととのえるのもへたでしたし、フトンふとんを、羽はねが舞まうまでよくふるいませんでした。やがて、こんなようすに、ホレばあさんは、うんざりしてきて、なまけ者の悪い子わるこに、奉公ほうこうの打ち切りうちきりを言いわたくしました。悪い子わるこは、これを聞きくと、すっかり喜よろこんで、「いよいよ金きんの雨あめが降ふつてくるわよ」と考かんがえました。ホレばあさんは、悪い子わるこも門もんのところへつれて行ゆきました。ところが、悪い子わるこが門もんの真下ましたにやつて来ると、金きんのかわりに、大釜おおがまいっばいのコールタールが、ドオーと、ぶちまけられました。「これが、おまえの奉公ほうこうのごほうびじゃよ」と、ホレばあさんは言いつて、門もんをしめてしまいました。こうして、なまけ者の悪い子わるこは、全身ぜんしんコールタールまみれになつて、家いえに帰かえつて来きました。すると、悪い子わるこを見て、井戸いどの上うへにとまっていたオンドリが、こう鳴なきました。

「コケッコオー、

うちのきたないお嬢じょうちゃんのお帰かえりだよー。」

そして、このコールタールは、悪い子わるこの体からだからとれず、一いつしやう生体からだにこびりついたままでした。

『赤ずきん』(KHM二六)

むかしむかし、あるところに、小さなかわいい女の子がおりました。この子を見るだけで、だれでもかわいがらずにはおられませんでした。だれよりも一番かわいがっていたのは、おばあさんでした。おばあさんは、この子にはなんでもあげたくなくて、なにをあげたら良いのか分からなくなるほどのかわいがりようでした。あるとき、おばあさんは、真つ赤なビロード地でできた赤ずきんをおくりました。すると、この赤ずきんがとても良くこの子に合いましたので、この子は、それがいいのものをかぶろうとはしませんでした。それで、この子は、「赤ずきん」としか呼ばれなくなりました。まいました。あるとき、お母さんが、赤ずきんに、こう言いました。「おいで、赤ずきん。ここにお菓子が一つとブドウ酒が一本あるでしょ。これを、おばあさんのところへもってってちょうだい。おばあさんは、病気で弱ってらっしゃるから、めしあがると元気がでると思うの。でも、ちゃんときょうき良くして、おばあさんにごあいさつしてね。きちんといつもの道を通って、より道をしちやだめよ。そんなことしたら、ころんでピンをこわして、病気のおばあさんにあげるものがなくなってしまうからね。」

赤ずきんは、「だいじょうぶ、ちゃんとそうするわ」と言つて、お母さんと指きりげんまんしました。ところで、おばあさんは、村から歩いて三十分かかる森の中に住んでおりました。赤ずきんが森の中に入ると、オオカミと出会いました。ところが、赤ずきんは、オオカミがどんなに悪いけものかということを知りませんでしたので、オオカミをこわいとも思いませんでした。「こんにちは、赤ずきんちゃん」と、オオカミは言いました。「こんにちは、オオカミさん。」「こんにち朝早く、どこへ行くの、赤ずきんちゃん。」「おばあさんのところよ。」「エプロンの下にもっているのは、なんだい。」「病気で弱ってるおばあさんにあげるお菓子とブドウ酒よ。きのう、お母さんといっしょに焼いたの。おばあさんがこれ

を食べて、早く元気になって欲しいから。」赤ずきんちゃん、おばあさんのおうちには、どこなの。「森の中よ、まだたっぷり十五分もかかるわ。大きなカシの木が三本あって、その下におばあさんのおうちがあるの。まわりにハシバミの垣根があるおうちよ。オオカミさん、知ってるでしょ」と、赤ずきんは言いました。オオカミは、心の中では、「若くて、やわらかそうな女の子だ。こりゃあ、おまえさんにとっちゃあ、すごいごちそうだぞ。さあ、どうしたものかな、ごちそうにありつくためにはな」と考えました。そこで、オオカミは、しばらく赤ずきんとならんで歩きましたが、やがて、こう言いました。「赤ずきんちゃん、見てごらんよ、森の中にはきれいな花が咲いているじゃないか。どうして、あたりをながめてみないのかなあ。赤ずきんちゃんには、ぜんぜん耳に入らないようだねえ。あんなにかわいい声で歌ってる小鸟たちの歌がさあ。まるで、学校にでも行くように、赤ずきんちゃんは、前を向いてばかり歩いてるよね。この森の中は、こんなに楽しいっていうのにさあ。」

赤ずきんは、見上げてみました。すると、こもれ日があちこちでキラキラ光るようすや、あたり一面に咲いているきれいな花を見ると、「おばあさんに、花束をもって行ったら、きつと喜ぶでしょうねえ。まだ早いんだから、ちゃんと時間通りに着くわよね」と考えて、森のわき道に入って、花を探しました。そうして、花を一本折ると、もつと遠くへ行ったら、もつときれいな花がありそうな気がして、花また花と追いつづけているうちに、どんどん深い森の中へ入って行ってしまうました。ところが、オオカミの方は、まっしぐらにおばあさんの家へ向かい、その家の戸をトントンとたたきました。「どなたかねえ。」「赤ずきんよ、おばあさんにお菓子とブドウ酒をもって来たの。あけてちょうだい。」「取っ手をおしておくれ！」と、おばあさんは叫びました。「おばあちゃんね、体が弱くってね、起きられないんだよ。」オオカミは、取っ手をおして、中に入り、ひとことも言わずに、まっすぐおばあさんのベッドに行き、おばあさんをのみこんでしまいました。それから、オオカミは、おばあさんの寝巻きを着て、おばあさんのずきんをかぶって、おばあさんの

ベッドの中へもぐり、そして、手をのばして、カーテンを引きました。

赤ずきんはといえば、花を探してあちこち歩き回っていました。やがて、もうこれいじょうもてないほどたくさんの花を集めたとき、ようやくおばあさんのことを思いだし、また、おばあさんの家へ向かいました。おばあさんの家にと、戸があいていましたので、赤ずきんは、変だなと思いました。部屋の中に入ると、中のようにすがいつもと違って、ように見えましたので、「まあ、どうしたのかしら、きょうは、とても気味が悪いわ。いつもなら、おばあさんのところに来ると、とても楽しいのにねえ！」と、赤ずきんは考えました。このあと、赤ずきんは、ベッドのところに行って、カーテンをあけました。すると、ベッドにはおばあさんが横になっていましたが、ずきんをすっぽり顔までかぶって、ひどく変なかつこうに見えました。「まあ、おばあさん、なんて大きなお耳をしているのかしら！」「おまえの言うことが、もっとよく聞こえるようにさ。」「まあ、おばあさん、なんて大きなお目めをしているのかしら！」「おまえを、もっとよく見えるようにさ。」「まあ、おばあさん、なんて大きなお口をしているのかしら！」「おまえを、もっとよくつかめるようにさ。」「でも、おばあさん、なんておそろしく大きなお口をしているのかしら！」「おまえを、もっとよく食べられるようにさ。」オオカミは、こう言うやいなや、ベッドから跳びだして、かわいいそうな赤ずきんを、ぱくりとのみこんでしまいました。

オオカミは、こつてりとしたごちそうをお腹につめこむと、またベッドへもぐりこんで、眠りこんでしまいました。そうして、ものすごいいびきをかき始めました。そのとき、ちょうど森の狩人が、そばを通りかかり、「あのおばあさん、なんていびきをかいているんだらう。どうしたのか、ちよつと見てやらなくちゃならんな」と独り考えました。そうして、狩人は、部屋に入つて、ベッドの前にやって来ると、その中にはオオカミが寝ていました。狩人は、このオオカミを長いこと探していたのです。狩人が鉄砲でねらいをつけましたが、そのとき、「ひよつとしたら、オオカミのやつ、お

ばあさんをおみこんでいるかも知れないし、それに、まだ助けることができるかも知れん」ということに気づいて、鉄砲で撃つのはやめて、そのかわり、ハサミを取って、眠っているオオカミのお腹を切り開きました。少し切ると、狩人は、真つ赤なずきんが見えてきました。狩人が、もう少し切ると、女の子が跳びだして来ました。「ああ、なんておそろしいんでしょう。オオカミのお腹の中は、ひどく暗いからねえ！」それから、おばあさんもまた、生きたままオオカミのお腹から出て来ました。すると、赤ずきんは、大きくて重い石をいくつももって来て、それをオオカミのお腹につめこみました。やがて、オオカミが目をさまして、逃げだそうとしましたが、石があんまり重いので、オオカミは、たちまちその場にへたばりこんで、死んでしまいました。

これを見て、三人は一安心しました。狩人は、オオカミの皮をはぎ、おばあさんは、赤ずきんのもって来てくれたお菓子を食べ、ブドウ酒を飲みました。そして、赤ずきんは、こう思いました。「お母さんがだめとおっしゃったら、これからは、二度と一人では森の中で、より道なんかしないわ。」

また、次のようなお話もあります。あるとき、赤ずきんが、おばあさんに、もう一度お菓子をもって行くと、別のオオカミが赤ずきんに声をかけて、赤ずきんにより道させようと思いました。ところが、赤ずきんは、用心して、わき目もふらずに道を歩いて、おばあさんに、「道の途中でオオカミに出会ったら、オオカミは『こんにちは！』とあいさつしたけれど、でも、その悪いこんたんは、その目つきですぐ分かりましたよ、もし、人通りの多い道でなかったら、オオカミは、あたしを食べたんでしようねえ」と言いました。「そうそう」と、おばあさんは言いました。「戸に鍵をかけようか。オオ

カミが入ってこれないようにね。」まもなく、オオカミが、トントンと戸をたたいて、「あけてちょうだい、あたし、赤ずきんよ。おばあさんにお菓子をもつて来たの」と呼びかけました。ところが、二人はじつとだまりこんで、戸をあけませんでした。すると、その悪いオオカミは、何回か家のまわりを回ると、とうとう屋根の上へ跳び上がりました。こうして、夕方になって、赤ずきんが家へ帰るまで待つて、出て来たなら、こっそりそのあとをつけて、暗がりですべてしまおうというこんたんでした。ところが、おばあさんは、オオカミのこんたんに気づいておりました。さて、家の前には、大きな石のおけが一つありました。そこで、おばあさんは、赤ずきんに、「手おけをもつんだよ、赤ずきん。おばあさんはね、きのうソーセージをゆでたんだよ。さあ、ソーセージをゆでたそのゆで汁を、石おけの中へ入れとくれ！」赤ずきんは、その大きな大きな石おけが、まんぱいになるまで、ゆで汁を運びました。すると、ソーセージのいい匂いがオオカミの鼻へと流れてきました。オオカミは、鼻をクンクンさせて、下の方をのぞきました。とうとう、オオカミは、屋根からすべり落ちて、まっすぐに、首を支えておれなくなつて、ズルズルとすべり始めました。こうして、オオカミは、屋根からすべり落ち、まっすぐに大きな石のおけにはまつて、おぼれ死んでしまいました。ところで、いっぽう赤ずきんは、楽しそうに家へ帰りました。もちろん、だれにも、ひどいめにあわされることはありませんでした。

『手なし娘』(KHM三二)

一人の粉ひきがおりましたが、だんだん貧乏になつて、もっているものは、粉ひきの水車とそのうしろに生えている大きなリンゴの木一本だけとなりました。あるとき、粉ひきが森の中へ入つて、たきぎを取つておりますと、そこへこれま

でまったく見たことのない一人のおじいさんがやって来て、粉ひきにこう言いました。「なんで、おまえさんは、苦労して木など切っているのかね。わしが、おまえさんを金持ちにしてあげるさ。もしおまえさんが、水車のうしろにあるものをわしにくれると約束してくれたならな。」「ほかでもないリンゴの木のことじゃな」と、粉ひきは考えましたので、「いذار」と答えて、その見知らぬ男に証文をしたためました。すると、その男は、せせら笑いながら立ち去りました。粉ひきが家に帰ってきましたと、おかみさんが出迎えて、こう言いました。「ねえ、おまえさん、どこからだしぬけに、お金わが家に降ってきたっていうんだらうね。いきなり、そこいらじゅうの木箱荷箱がお金でいっぱいになっちゃったんだよ。だれかもって来たわけでもないのにさ。どうなっちゃったのか、あたしにやさっぱり分からないよ。」粉ひきは、こう答えました。「そいつあ、おれが森の中で出会ったよそもんのやったことさ。そいつあね、おれに宝物をたんまりくると約束したんだよ。そのかわり、おれは、水車のうしろにあるものをやるって証文をしたためたのさ。あの大きなリンゴの木一本ぐらいやったってかまわないさ。」「まあ、なんてことだい」と、おかみさんは、ぎょうてんして、言いました。「そいつあ、悪魔だったのさ。そいつが言ってたのは、リンゴの木じゃなくて、うちの娘のことだよ。娘は、水車のうしろにいて、庭をはいていたんだから。」

粉ひきの娘は、きりようよしで、信心深い子でしたので、三年間というものの、神さまをうやまい、神さまの教えを守って暮らしました。さて、約束の期限がきて、悪魔が娘をつれて行く日がやってきました。そこで、娘は、身を洗ってきれいに清め、自分のまわりにチョークで一つの輪を書きました。悪魔は、いやに早く姿を現しましたが、娘に近づくことができませんでした。おこって悪魔は、粉ひきにこう言いました。「娘から水をみんな取り上げて、体を洗えねえようにしろ！ でなきや、おれはあいつに手も足も出せねえじゃないか。」粉ひきは、こわくなって、その通りにしました。あくる朝、またもや悪魔はやって来ましたが、娘は両手を顔にあてて泣いておりましたので、両手は涙に洗

われ、とても清らかでした。そこで、悪魔は、またしても近づくとできませんでしたので、いかり狂って、粉ひきに、こう言いました。「娘の両手をちよんぎつちまえ！ でなきや、娘をどうにもできやしねえ。」粉ひきは、びっくりして、こう答えました。「どうして、わが子の手を切るなんてことができましようや！」すると、悪魔は、粉ひきをおどして、こう言いました。「言う通りにしなきや、おめえをおれさまのものにするぞ。おめえをつれてくぞ。」すると、粉ひきは、びくついて、「言われた通りにする」と約束してしまいました。そこで、粉ひきは、娘のところに行つて、こう言いました。「なあ、おまえ、お父さんがおまえの両手を切らないと、悪魔がお父さんをさらって行くんだよ。こわくなって、お父さんは、そうすると約束してしまつたんだよ。お父さんがこまっているんだから、なんとか助けてくれないかねえ。おまえにひどいことをするけど、ごめんよな。」娘は、こう答えました。「お父さん、あたしだったら、お父さんの気のすむようにしてちょうだい。あたしは、お父さんの子ですから。」こう言つて、娘は両手をさしのばすと、両手をお父さんに切らせました。悪魔は、三度目にやつて来ましたが、娘は、手首のない腕を顔にあてて、長いこと泣きくれておりましたので、両腕は涙に洗われて、清らかでした。それで、悪魔も退散せざるをえませんでした。こうして、悪魔は、娘をうばう権利をすっかり失つてしまいました。粉ひきは、娘に、こう言いました。「父さんはな、おまえのおかげで、大金持ちになれたよ。だから、父さんは、おまえを一生、後生大事にするからな。」ところが、娘は、こう答えました。「あたし、ここにはおられません。出て行きます。きつと、情け深い人たちが、あたしの必要なものぐらひは恵んでくれるでしょうから。」こう言つと、娘は、手首のなくなつた両腕を背中にしばりつけてもらつて、日の出とともに、旅に出かけました。こうして、一日中歩き続けると、夜がやってきました。そのとき、娘は、とある王さまの庭にたどり着きました。すると、月の光に照らされて、その庭の中には、みごとな実がすずなりになっている木が何本も見えました。でも、庭のまわりには、水のお堀がありましたので、娘は、中に入ることができませんでした。娘は、一日中歩き通

しで、一口も食べておりませんでしたので、お腹がすいてがまんできないほどでした。そこで、娘は、考えました。「ああ、あの中に入つて、あの実をちよつと食べなければ、あたし、お腹がへつて、死んじゃうわ。」娘は、ひざまずき、主の御名を呼び、お祈りをしました。すると、とつぜん、一人の天使がやって来て、お堀の水門をしめてくれました。それで、お堀の水がすっかりひいて、娘は、お堀を通りぬけることができず。さて、娘が庭の中へ入りますと、その天使もついて行きました。実のなっている一本の木が、娘の目に入りました。それは、みごとなナシの実でした。ところが、それらの実は、全部かぞえられていたのです。娘は、ナシの木のところへ行つて、空腹をいやすために、口を使つて、木になっているナシの実を一つ食べましたが、それいじょうは食べませんでした。庭師が、このようすを見ておりましたが、そこに天使がいたものですから、こわくなつてしまいました。それで、庭師は、その娘は幽霊だと思つて、じつとおしだまり、人を呼ぶ勇氣も、幽霊に話しかける勇氣もできませんでした。ナシの実を一つ食べると、娘は、空腹がいやされましたので、庭から出て、しげみの中へかくれました。お庭のもちぬしである王さまが、あくる朝、お庭へおりに来て、ナシの実をかぞえました。すると、ナシの実が一つなくなっていることに気づいて、庭師に、「ナシの実はどこへ行つたのだ、木の下に落ちてゐるわけでもないのに、なくなつてゐるではないか」とたずねました。そこで、庭師は、こう答えました。「昨晚、幽霊が入つてまいりました。幽霊には、両手がなかつたのでございますが、口を使つてナシを一つ食べたのでございます。」すると、王さまは、こう言いました。「その幽霊は、いかようにして、水の堀をこえ、庭へやつて来たかと申すのじゃな。ナシを食べたのちに、いずこへ行つてしまつたと申すのじゃ。」庭師は、答えました。「雪のように真っ白な着物を着た方が天から降りてまいりまして、その方が水門をとじて、水をせきとめましたので、その幽霊がお堀を通つてこられるようになったのでございます。その方は、天使にちがひございませんでしたので、わたくしは恐ろしくなりました、たずねも、人を呼びもいたしませんでした。幽霊は、ナシを食べますと、またもどつて行つた

のでございます。」すると、王さまは、「そちの申す通りなら、今晚わしがそちのそばで見張ってみることにしようぞ」と言いました。

暗くなると、王さまは、お庭へおりました。王さまは、一人のお坊さんをつれて来ていましたが、このお坊さんに、幽霊と話させてみようと思つたのでした。三人は、木の下に腰をおろして、気をつけておりました。真夜中ごろ、例の娘がしげみからはい出て、木のところへやって来て、またもや口を使つて、ナシの実を一つ食べてしまいました。そして、娘のそばには、白い着物を着た天使がおりました。そこで、お坊さんは、前へ進み出て、こう言いました。「あなたは、神さまのもとから来たのかね、それとも、人間の世界から来たのかね。そなたは、幽霊なのかね、それとも、人間なのかね。」娘は、答えました。「わたくしは、幽霊ではございません。あわれな人間でございます。神さまがいには、どんな人から見捨てられた人間でございます。」すると、王さまは、言いました。「たとえそなたが、世の中の人人みなから見捨てられようとも、わしはそなたを見捨てはしないぞ。」王さまは、娘を自分のお城へつれて行きました。娘は、たいへんきりようよしで、信心深くありましたので、王さまは、この娘を心から好きになりました。そこで、王さまは、この娘に銀の手を作らせて、娘を自分のお妃に迎えました。

それから一年たつて、王さまは、戦争に行くことになりました。そこで、王さまは、若いお妃さまを母ぎみにたのんで、こう言いました。「妃が子を産むときになりましたら、くれぐれもお世話をお願いいたします。それに、ただちに手紙でお知らせください。」さて、お妃さまは、元気な男の子を産みました。そこで、年老いた母ぎみは、急いで手紙を書いて、うれしい知らせを王さまに送りました。ところが、その使いの者は、途中とある小川のほとりで休憩し、長旅の疲れから、ついうつかり眠りこんでしまいました。そこへ悪魔がやって来ましたが、この悪魔は、信心深いお妃さまを、なんとかすきを見つけてひどいめにあわせてやろうと考えていたものですから、その手紙を別の手紙とすりかえ

てしまいました。そのすりかえた手紙には、お妃さまが、ひどいかたわものを産んだと書いてありました。王さまは、その手紙を読んだとき、びつくりして、たいそう悲しみましたが、それでも王さまは、自分が帰るまで、お妃さまを大事にお世話するようと、返事を書きました。使いの者は、手紙をもつてもどつて来ましたが、前と同じ場所で休憩し、眠りこんでしまいました。すると、またしても悪魔がやって来て、別の手紙を使いの者のふところへ入れました。その手紙には、お妃さまを子どももろとも殺すように、と書いてありました。年老いた母ぎみは、その手紙を受け取ったとき、跳び上がるほどびつくりしましたが、それを信じるのができませんでしたので、もう一度手紙を書きました。ところが、母ぎみは、同じ返事もらいました。それというのも、悪魔は、そのたびに使いの者のふところに、にせの手紙をのびこませたからです。おまけに、最後の手紙には、殺したという証拠に、お妃さまの舌と目を取って置くように、とさえ書いてありました。

年老いた母ぎみは、なんの罪も科もない者の血を流せと言われましたので、思わず泣いてしまいました。そこで、夜になると、一匹のメスのシカをつれてこさせて、その舌と目をぬきとつて、それをしまつて置きました。そのあとで、母ぎみは、お妃さまに向かつて、こう言いました。「わたくしは、王さまの命とて、そなたを殺させることなどできません。とは申せ、そなたも、ここにこれいじょうとどまつていてもなりません。子どもをつれ、人の世に出て、遠いところに行きなさい。決してもどつて来るではありませんせぬぞ。」母ぎみは、子どもをお妃さまの背中にゆわえつけますと、かわいそうに、お妃さまは、目を泣きはらして、立ち去つて行きました。お妃さまは、うっそうとした大きな森の中へ入つて行きました。そこで、お姫さまは、ひざまずいて、神さまにお祈りをしました。すると、主の天使がお妃さまの前に現れ、そうして、お妃さまを小さな家へつれて行きました。その家には、「この家には、どなたもただでお泊まりになれます」という小さな看板がかかつておりました。小さな家からは、雪のように白い乙女が出て来て、「ようこそ、お妃さ

ま」と言つて、お妃さまを中へまねき入れました。中に入ると、乙女は、ひもをほどいて、小さな男の子をお妃さまの背中からおろし、お妃さまの乳房にあてがって、お乳を飲ませました。それから、男の子を、きちんと整えてある小さなベッドに寝かせました。すると、そのあわれなお妃さまは、こう言いました。「どうしてあなたは、わたくしが妃であつたということをご存じのですか。」これに対して、白い乙女は、「わたくしは、あなたとあなたのお子さまをお世話するよう神さまから仰せつかった天使なのです」と答えました。こうして、お妃さまは、この家に七年とどまつて、手厚い世話を受けました。やがて、お妃さまの信心深い生活のおかげで、神さまのお恵みによつて、お妃さまは、切られてしまつた手首が、またもと通りに生えてきたのでした。

王さまは、やつこのことと戰場から家へ帰つて来ました。王さまが、まつさきにしたかつたことは、妻と子に会うことでした。年老いた母ぎみは、王さまを見ると、泣きだして、こう言いました。「おまえは、ひどい人だね。わたくしに、二人の罪のない人間の命をうばえと書いてよすんだからねえ！」母ぎみは、王さまに、悪魔がすりかえた二通の手紙を見せ、さらに続けて、言いました。「わたくしは、おまえの命令通りのことをしましたよ。」母ぎみは、こう言つて、証拠の品である舌と目を出して見せました。すると、王さまは、あわれな妻と子の身の上を悲しんで、母ぎみよりも激しく泣きだしました。そこで、年老いた母ぎみは、王さまをかわいそうに思つて、こう言いました。「安心して下さい。妃は、まだ生きています。わたくしは、ひそかにメスのシカを一匹殺させ、そのシカから証拠の品を取つたのです。そうしておいて、おまえの妃の背中に、子どもをゆわえつけ、人の世に出て、遠いところに行くよう申しつけました。それに、妃は、二度とここへもどつてこないよう誓いを立てなくてはならなかつたんですよ。なんといつても、おまえが、妃のことでひどく腹を立てていたんですからね。」これを聞いて、王さまは、言いました。「青空のさいはてまででも、わたくしはまいります。そして、愛する妻と子に再びめぐり会うまでは、飲みも食ひもいたしません。妻と子が、亡く

なるか、飢え死にでもしなければ、会えるでしょうから。」

こののち、王さまは、七年近くも、あちこち歩き回りました。そうして、王さまは、ありとあらゆる岩山や洞窟をくまなく探しましたが、二人にめぐり会うことはできませんでした。それで、王さまは、二人は力がつきて死んでしまった、と考えました。王さまは、この間中ずうつと、飲まず食わずでおりましたが、それでも神さまは王さまを生かしておかれました。ついに王さまは、とある大きな森の中に入り、そこで例の小さな家を見つけました。この家には、「ここでは、どなたもただでお泊まりになれます」と書いた小さな看板がかかっています。そのとき、中から白い乙女が出て来て、王さまの手を取り、中へ案内して、「ようこそ、王さま」と言ってから、王さまに、どちらからこられたかをたずねました。王さまは、こう答えました。「わしは、まもなく七年になるのだが、あちこち歩き回って、わしの妻と子を探しておつたのだ。だが、いまだに見つけだすことができないのじゃ。」天使は、王さまに食べ物と飲み物をさしだしましたが、王さまは、それも受けずに、ちよつとだけ休ませてもらいたいと言いました。そうして、王さまは、横になって眠り、自分の顔に手ぬぐいをかけました。

このあと、天使は、お妃さまとその息子のいる部屋へ入って行きました。お妃さまは、自分の息子をふだんは「苦労太」と呼んでおりました。すると、天使は、お妃さまに、こう言いました。「お子さんをおつれになって、出ていらつしゃいませ。ご主人さまが、いらつしゃいましたよ。」そこで、お妃さまは、王さまのいるところへ出向きましたが、そのとき、手ぬぐいが王さまの顔からすべり落ちました。すると、お妃さまは、「苦労太や、手ぬぐいを拾って、もと通りお父さんの顔にかけてあげなさい」と言いました。子どもは、手ぬぐいを拾って、もと通り王さまの顔にかけました。王さまは、うとうとしながら、このやりとりを聞いていましたが、もう一度その手ぬぐいを、今度は、わざとすべり落としました。すると、小さな息子は、もどかしくなつて、こう言いました。「お母さん、なんでぼくが、お父さんの顔に手ぬ

ぐいをかけるなんて、できるのさ。この世の中に、ほくのお父さんはいないのに。ほくは、お祈りを習ったよ。天にましますわれらが父よ、つてね。お母さん、言ったでしょ。ほくのお父さんは、天国にいて、神さまなんだって。なんで、ほくがこんな野蛮な男とつき合わなくちゃならないのさ。こんな男、ほくのお父さんじゃないよ。」これを聞くと、王さまは、起き上がって、お妃さまがどなたなのかをたずねました。お妃さまは、答えました。「わたくしは、あなたの妻でございます。そして、これが、あなたの息子の苦勞太です。」王さまは、お妃さまの血のかよった手を見て、こう言いました。「わしの妻は、銀の手をもっていたが。」すると、お妃さまは、答えました。「慈悲深い神さまが、生まれたままの手を、もと通りに生やしてくれたのでございます。」すると、天使が部屋に行つて、銀の手を取つて来て、王さまに見せました。そこで、初めて王さまは、それが自分の愛する妻であり、愛するわが子であることをさとり、二人にキスしました。王さまは、喜んで、こう言いました。「これで、胸につかえていた大きな重石がとれたぞ。」これを聞いて、神さまのお使いである天使は、もう一度全員にごちそうをふるまいました。それから、三人は、家にいる年老いた母ぎみのところへ帰りました。お城の人人は、だれもかれも大喜びでした。王さまとお妃さまは、もう一度婚礼の式をあげました。そして、二人は、それから一生、幸せに暮らしました。

『イバラ姫』(KHM50)

むかしむかし、あるところに王さまとお妃さまがおりました。二人は、毎日、「ああ、一人でも子どもが欲しいものだねえ!」と言つておりましたが、いつになつても、子どもはさずかりませんでした。あるとき、お妃さまが、水あびを

していると、蛙が一匹、水の中から陸へはい上がって来て、蛙はお妃さまに、「あんたの願いは、かなえられるよ。あんたは、女の子を産むよ」と言いました。蛙が予言したことが、本当になつて、お妃さまは、女の子を産みました。この子がとてもかわいいので、王さまは、うれしさのあまり、むがむちゅうで、大きな宴会をもよおしました。王さまは、親戚や友人、知人ばかりではなく、仙女たちも招待して、わが子をかわいがり、目をかけてもらおうと思ひました。この国には、仙女が十三人いたのですが、王さまは、その食事に使う金の皿を十二枚しかもつておりませんでしたので、十三番目の仙女を招待することはできませんでした。招待された仙女たちがやつて来て、宴会が終わると、仙女たちは、子どもに、それぞれ、ふしぎなおくり物をさずけました。一番目の仙女は、美德をさずけ、二番目の仙女は美しさを、三番目の仙女は富をさずけるといふふうにして、十一番目の仙女まで全員が、この世でのすばらしい物を子どもにさずけました。ちようど、十一番目の仙女がおくり物をさずけたそのとき、十三番目の仙女が中へ入つて来ました。この仙女は、自分が招待されなかつたそのうらみをはらそうと思つたのです。十三番目の仙女は、「この姫は、十五歳になつたら、糸巻の錘に刺されて、死ぬ運命じゃよ」と叫びました。そのとき、十二番目の仙女が進みでました。とはいつても、この仙女には、その不吉な呪いをふりはらうことはできませんでしたが、でも、その呪いを弱めることはできたのです。そこで、十二番目の仙女は、こう言いました。「死ぬのがその運命ではなく、百年間の深い眠りが、この姫の運命じゃ。」

王さまは、かわいいわが子をなんとか不幸なめにあわせまいとして、国中の錘という錘をこわしてしまふよう、命令をだしました。ところで、お妃さまには、魔女たちのおくり物がすべて身にそなわりました。お妃さまは、とても美しく、しとやかで、親切で、お利口でしたので、お妃さまに会う人だれもが、かわいがらずにはおられませんでした。さて、お姫さまが、ちようど十五歳になつた日のこと、王さまとお妃さまは、よそに出かけて、お妃さまだけが、たった一

人つきりで、お城に残っておりました。そこで、お姫さまは、お城中を歩き回って、気の向くままに、小さな部屋や大きな部屋をながめました。最後に、とある古い塔に行きあたりました。お姫さまは、せまい階段をのぼって行くと、小さな戸に行き着きました。錠前には、さびついた鍵がささっていました。お姫さまが、鍵を回すと、戸がバタンとあきました。そこにある小さな部屋の中には、一人のおばあさんが座って、せつせと麻をつむいでおりました。「あら、おばあさん」と、お姫さまは言いました。「そこで、なにをしているのかしら。」「糸をつむいでいるのじゃよ」と、おばあさんは言って、こつくりとうなずきました。「とても楽しそうに飛び回っているわねえ!」と、お姫さまは言うと、錘を手を取って、自分でもつむいでみようと思いました。ところが、お姫さまが、その錘にふれると、たちまち呪いが現実となつて、お姫さまは、その錘で指をつき刺してしまいました。

すると、痛みを感じたとたんに、お姫さまは、深い眠りに落ちてしまいました。王さまとお妃さまは、ちようどお城に帰って来たところでしたが、城中の家来たちといっしょに、眠り始めてしまいました。やがて、馬たちは馬小屋で、犬たちは中庭で、ハトたちは屋根の上で、ハエたちは壁にとまったまま、それぞれかまどでパチパチ燃えていた火までが、静かになつて、眠りこんでしまいました。すると、焼き肉も、ジュージュー音をたてなくなり、料理番はいえ、ちよつとしくじつた見習い小僧の髪の毛をつかんで引っぱろうとしましたが、途中でやめて、眠りこんでしまいました。生きて息をしているものは、全部動かなくなつて、眠りこんでしまいました。

やがて、お城のまわりには、イバラが生え始め、垣根を作りました。イバラは、年ごとに高くなるので、とうとうお城全体を取り巻いてしまいました。それどころか、お城よりも高くなるので、お城は、もはやまったく見えなくなつて、屋根の上の旗さえも見えなくなつてしまいました。やがて、眠れる美しいイバラ姫の伝説が国中にひろまりました。お姫さまは、ほかでもありません、「イバラ姫」と名づけられたのでした。それで、ときどき王子さまたちがやって来て

は、垣根を通りぬけて、お城の中へ入ろうとしました。ところが、それは、その王子さまたちには、むりなお話でした。それというのも、イバラの枝は、まるで手があるかのように、おたがいにしつかりと手を取り合ったので、王子さまたちは、イバラにひっかかったきり、そこから出られずに、はじめな死に方をしたのでした。長い年月がたつて、再び一人の王子さまが、この国へやって来ました。とあるおじいさんが、この王子さまに、イバラの垣根のお話をしました。「垣根のうしろにはな、お城があつての、その中にや、イバラ姫という、とびつきりー美しいお姫さまがの、お城中のご家来衆といっしよにな、眠っているということじゃよ。」そのおじいさんは、また、自分のおじいさんから聞いた話として、すでに多くの王子さまたちが、そのイバラの垣根を通りぬけようとしたが、イバラにひっかかったきり、そこから出られずに、あわれな死に方をしたというお話をしてくれました。すると、若い王子さまは、こう言いました。「そんな話で、ぼくはひるまないぞ！ イバラを通りぬけて、ぼくは美しいイバラ姫に会うんだ。」おじいさんが、若い王子さまを、なんとか思いとどまらせようとしても、若い王子さまは、まったく聞く耳をもちませんでした。ところが、その王子さまがやって来たちようどその日が、百年間の眠りの終わる日だったのです。そこで、王子さまが、イバラの垣根に近づくと、そこにはまぎれもなく、大きくて美しい花花が咲いていて、ひとりでに道をあげたので、王子さまは、傷一つおわずに通りぬけることができました。王子さまが通りぬけると、花花は道をとじて、再び垣根になつてしまいました。王子さまが、お城の中に入ると、中庭には馬たちとマダラ模様の獵犬たちが眠っていて、屋根の上にはハトたちが、小さな頭を羽の下へつつこんで、眠っていました。部屋の中に入ってみると、ハエたちが壁にとまったまま眠り、料理番が台所で、まるで見習い小僧をつかまえようとするかのように、手を上げ、女中は、黒いニワトリの前に座つて、羽をむしり取ろうとしていました。そこで、王子さまは、さらに奥へ行くと、広間の中で家来たちが、みんな横になつて眠っているのが見えました。そして、一段と高いところにある玉座のそばには、王さまとお妃さ

まが横よこになつておりました。さらに奥おくへ進むと、あたり一面いちめんしずまりかえつて、自分の息いきの音おとさえ聞きこえるほどでした。とうとう、王子おうじさまは、塔とうのところによつて来て、小さな部屋へやの戸とをあけると、その中なかには、イバラ姫ひめが眠ねむつておりました。そこに眠ねむっているイバラ姫ひめは、とても美うつくしかったので、王子おうじさまは、そこから目めをはなすことができないほどでした。王子おうじさまは、身みをかがめて、イバラ姫ひめにキスしました。そうして、王子おうじさまが、イバラ姫ひめにふれたとたんに、イバラ姫ひめは目めをあけて、眠ねむりからさめると、王子おうじさまをとても親したしげに見みつめました。それから、二人ふたりは、いっしょに下したへおりに行ゆきました。すると、王おうさまが、続つづいて、お妃きさきさまが、そして、最後さいごに、家来けらいたち全員ぜんいんが眠ねむりからさめて、おたがい、目めを皿さらのようにして、見みつめ合あいました。やがて、馬うまたちは中庭なかにわで起おき上あがつて、ブルブルつと体からだをゆさぶりました。獵りようけん犬けんたちは、はね上あがつて、しつぽをふりました。屋根やねの上うへのハトたちは、小さな頭あたまを羽はねの下したから出だして、あたりを見回まわして、野原のほらへ飛とんで行ゆきました。壁かべにとまっていたハエたちは、また、はいだしました。台所だいどころの火ひは、燃もえだして、炎ほのおを上あげて、煮物にものをたき始めはじめました。焼やき肉にくは、ジュージュー音おとをたて始めはじめました。料理番りようりばんは、見習みならい小僧こぞうの横よこつらをはりとばしましたので、小僧こぞうは悲鳴ひめいを上あげました。女中じよちゆうは、ニワトリの羽はねをむしり終おえました。こうして、王子おうじさまとイバラ姫ひめの婚こん礼れいの式しきは、とてもはなやかにとりおこなわれました。そして、二人ふたりは、一生いっしやうたの楽しく暮くらしました。

『白雪姫』(KHM五三)

むかしむかし、真冬まふゆのある日ひのことでした。雪ゆきが、まるで鳥とりの羽はねのように、空そらから舞まい落おちていました。そんなとき、一人ひとりのお妃きさきさまが、真まつ黒くろなコクタンこくたんの木きで梓わくどりされた窓まどのそばに座すわつて、針仕事はりしごとをしておりました。ぬいものをし

ながら、降る雪を見上げたとき、お妃さまは、針で指を刺してしまいました。すると、血が三滴、雪の上にたれました。その赤い色が、白い雪にしみると、とても美しく見えましたので、お妃さまは、心の中で、こう考えました。「雪のように肌が白く、血のように赤い唇をし、窓枠のように黒い髪をした子どもが欲しいものだわ。」そのごまもなく、お妃さまは、一人の女の子を産みました。その女の子は、肌は雪のように白く、唇は血のように赤く、髪はコクタンきの木のようきに黒かったので、「白雪姫」と呼ばれました。ところが、この白雪姫しろゆきひめが生まれると、お妃さまは、亡くなりまなした。

一年たつと、王さまは、新しいお妃さまをもらいました。そのお妃さまは、美しい女でしたが、うぬぼれが強つよく、思おもい上あがった女おんなでしたから、きりようが良いことにかけて、他人たにんに負まけることにはがまんができませんでした。お妃さまは、一枚いちまいのふしぎな鏡かがみをもっておりました。お妃さまは、その前まえに立たって、鏡かがみの中なかをのぞきこんで、こう言いいました。

「壁かべの鏡かがみよ、教おしえておくれ、

国中くにじゆうで一番いちばんの美人びじんは、だーれ。」

すると、鏡かがみは答こたえました。

「お妃さま、国中くにじゆうで一番いちばんの美人びじんは、お妃さま。」

これを聞くと、お妃さまは満足しました。というのも、お妃さまは、鏡がうそをつかないということを知っていたからです。

さて、白雪姫は大きくなり、どんどん美しくなりました。白雪姫は、七歳になると、まるで澄みわたった日のように美しく、お妃さまその人よりも美しくなりました。あるとき、お妃さまが、鏡に向かって、こうたずねました。

「壁の鏡よ、教えておくれ、

国中で一番の美人は、だーれ。」

すると、鏡は答えました。

「お妃さま、この国で一番の美人は、お妃さま、

けれど、あなたより千倍も美人なのは、白雪姫さま。」

これを聞くと、お妃さまは、ねたましさのあまり、顔色が土気色になったり、真つ青になったりしました。このとき以来、お妃さまは、白雪姫を見るたびに、はらわたが煮えくり返るほど、白雪姫がにくらしくてたまりませんでした。やがて、ねたまと思いが竹の子のように育って、お妃さまの心の中であまりにも大きくなったものですから、お妃さまは、昼も夜も、気の休まるひまもないほどでした。そこで、お妃さまは、狩人と呼んで、こう言いました。「あの子を森の中へつれてつておくれ。わたしは、あの子をもう二度と見たくない。森であの子を殺して、その証拠として

肺臓と肝臓とをもち帰るのだよ。」狩人は、お妃さまの言い付け通り、白雪姫をつれだしました。狩人が獵刀をぬいて、なんの罪もない白雪姫の胸をくし刺しにして殺そうとしたとき、白雪姫は泣きだして、こう言いました。「ねえ、狩人のおじちゃん、命だけは助けてちょうだい。あたし、このこわい森の中へ入って、もうぜったいおうちへはもどらないから。」白雪姫は、とてもかわいい子でしたから、狩人はついあわれに思って、「それじゃお行き、かわいいそうにな」と言いました。「どうもうな、けものが、まもなくおまえを食つちまうんだらうなあ」と、狩人は考えましたが、それでも、白雪姫を自分で殺す必要がなくなりましたので、まるで自分の胸にのっかっていた重石が、ころげ落ちたかのように、気が楽になりました。ちようど、うまいぐあいに、一匹のイノシシの子が跳びだして来ましたので、狩人は、それを殺して、その肺臓と肝臓を取りだし、証拠の品として、お妃さまのところへもち帰りました。料理人は、その肺臓と肝臓を塩ゆでにするよう言い付けられました。そうすると、そのよこしまな女は、それをたいらげて、自分では、白雪姫の肺臓と肝臓を食べたつもりでおりました。

さて、白雪姫は、かわいそうに、大きな森の中で、本当に一人ぼっちになってしまいました。白雪姫は、とてもこわくなりましたので、木木の葉を一枚、また一枚とながめておりましたが、どうしたら良いものか、見当もつきませんでした。そこで、白雪姫は、かけだしてみました。とんがった石つころを跳びこえたり、イバラを通りぬけたりしました。そのとき、こわいけものたちが、跳びでて来て、白雪姫のそばを通りすぎましたが、けものたちは、白雪姫にはなんの害もくわえませんでした。こうして、足の力の続くかぎり、白雪姫は、ひたすら先へ先へと進みました。やがて日も暮れそうになったころ、白雪姫は、一軒の小さな家を見つけましたので、休もうと思つて、家の中へ入りました。家の中にあるものは、みんな小さかったのですが、でも、えも言われないほど愛らしくて、清潔なものでした。そこには、白いテーブルかけをかけたテーブルが一つあって、その上には、七枚の小さなお皿があり、お皿には一枚一枚に小さなスプーンがついて

いました。そのほかに、七本の小さなナイフとフォーク、そして、七つの小さなコップが置いてありました。壁ぎわには、七つの小さなベッドが並べられていて、雪のように白いシートが、その上にかけていました。白雪姫は、とてもお腹がペコペコで、のどもカラカラでしたので、一枚一枚のお皿からちよっぴりずつ野菜とパンを食べ、一つ一つのコップから、ちよっぴりずつブドウ酒を飲みました。というのも、一人の分からだけ全部取ってしまうつもりなどなかったからです。これがすむと、白雪姫は、とても疲れておりましたので、小さなベッドに入りました。でも、どのベッドも体に合いませんでした。あるものは長すぎ、あるものは短すぎました。とうとう、七番目のベッドが合いましたので、白雪姫は、その中に横になったまま、「神さまの御心のままに」と祈って、眠りこんでしまいました。

さて、真っ暗になると、この小さな家の主人たちが帰って来ました。それは、お山の中で、鉱物を掘りだしたり、切りだしたりしている小人たちでした。小人たちは、七つの小さなランプに火をつけました。すると、家の中が明るくなり、自分たちが出かけたときのまんまではなかったからです。最初の小人が、言いました。「おいらのイスの上に座って食べたのは、だれだい。」二番目の小人が、言いました。「おいらのお皿から食べたのは、だれだい。」三番目の小人が、言いました。「おいらのパンを食べたのは、だれだい。」四番目の小人が、言いました。「おいらの野菜を食べたのは、だれだい。」五番目の小人が、言いました。「おいらのフォークでつついたのは、だれだい。」六番目の小人が、言いました。「おいらのナイフで切ったのは、だれだい。」七番目の小人が、言いました。「おいらのコップから飲んだのは、だれだい。」それから、最初の小人があたりを見回すと、自分のベッドのフトンが、ちよつとへこんでいるのに気づきましたので、こう言いました。「おいらのベッドに入りこんだのは、だれだい。」ほかの小人たちが、かけよって来て、叫びました。「おいらのベッドにも、だれか寝たぞ。」ところが、七番目の小人が、自分のベッドを見たとき、そこに横になって眠って

いる白雪姫の姿が目に入りました。そこで、この小人は、ほかの小人たちを呼びました。ほかの小人たちは、かけよつて来ましたが、そのおどろきのあまり、つい大声がでてしまいました。小人たちは、めいめい自分のランプをもつて来て、白雪姫を照らして見ました。「こりやー、おどろきだ！こりやー、おどろきだ！」と、小人たちは、叫びました。「なあんて、かわいい子どもなんだろう！」小人たちは、大喜びでしたので、白雪姫を起こさずに、そのままベッドに寝かしておいてあげました。そうして、七番目の小人は、自分の仲間のベッドで、一時間ずつ眠りました。やがて、夜が明けました。

朝になって、目をさまし、七人の小人たちを見たときに、白雪姫は、びっくりしてしまいました。でも、小人たちは親切で、「名前は、なんていうの」とたずねました。「あたし、白雪姫」と、白雪姫は答えました。「どうして、おいらたちの家に来たんだい」と、小人たちは、続けてたずねました。そこで、白雪姫は、小人たちに、ママ母が自分を殺させようとしたこと、けれども、狩人が命を助けてくれたこと、それから、一日中かけ回って、最後にとうとうこの家を見つけたという話を話して聞かせました。すると、小人たちは、こう言いました。「あんたが、おいらたちのうちのめんどろを見て、炊事や洗濯をしたり、ベッドを整えたり、針仕事や編物をして、なにからなにまできちんと片付け、清潔にしてくれたなら、あんたはおいらたちのところにいいし、それに、なんにも不自由させないよ。」そこで、白雪姫は、その約束をかわして、小人たちのもとにとどまりました。白雪姫は、おうちをきちんと整えました。小人たちは、毎朝お山へ出かけ、鉄鉱石や金鉱石を探し、夕方にはもどつて来ましたので、白雪姫は、それまでに小人たちの食事を準備して置かなくてはなりません。白雪姫は、一日中一人でいました。そこで、親切な小人たちは、白雪姫に注意して、こう言いました。「ママ母に気をつけるんだよ。まもなく、あんたがここにいることを知るだろうからね。だれも、うちの中へ入れちゃだめだよ。」

ところで、お妃さまは、白雪姫の肺臓と肝臓を食べたと思ひこんでおりましたので、再び国中で一番の美人にはかならないと考へて、鏡の前に行つて、こう言ひました。

「壁の鏡よ、教へておくれ、

国中で一番の美人は、だーれ。」

すると、鏡は答へました。

「お妃さま、この国で一番の美人は、お妃さま。

けれど、お妃さまより、千倍も美人なのはな、

お山の向こうの、小人たちのもとのな、

白雪姫さま。」

これを聞いて、お妃さまは、びつくりしました。というのも、お妃さまは、鏡がうそをつかないことを知つていたからです。そこで、お妃さまは、狩人が自分をだましたこと、そして、白雪姫がまだ生きてゐることに気づきました。こうなると、お妃さまは、どのようにして白雪姫を殺してやろうかと、また最初から考へに考へぬきました。というのも、お妃さまは、自分が国中で一番の美人になれなければ、ねたましく思ふあまり、心のやすまるひまがなかつたからです。とうとう、お妃さまは、いい考へをひねりだし、自分の顔に絵具をぬつて、商いばあさんのようになつた

うをしましたので、お妃さまだとは、まったく分からなくなりました。このかつこうで、お妃さまは、七つのお山をこえて、七人の小人たちの家へ行くと、戸をたたいて、「きれいな品物、いらんかねえ！」と呼びかけました。白雪姫は、窓から顔を出してのぞくと、こう言いました。「こんにちわ、おばあさん、どんなものを売っているの。」「いい品物じゃ、きれいな品物じゃよ」と、おばあさんは答えました。「色とりどりの飾りひもじゃよ」と言つて、おばあさんは、色とりも豊かな絹で編んだ一本の飾りひもを取りだしました。「こんないいおばあさんなら、中へ入れてもかまわないわ」と、白雪姫は考えて、戸のかんぬきをはずして、そのすてきな飾りひもを買いました。「おやまあ」と、おばあさんは言いました。「なんてかつこうしてるんだねえー！ さあ、おばあさんが、一つあなたの飾りひもをしめてあげるよ。」白雪姫は、まるで人をうたがう気持ちがないものですから、おばあさんの前に立つて、その新しい飾りひもをしめてもらいました。ところが、おばあさんは、すばやくひもをつかんで、とてもきつくしめつけましたので、白雪姫は、息がとまって、死んだようになり、たおれてしまいました。「これで、国中で一番の美人も、おしまいじゃ」と、おばあさんは言つて、急いで家を出ました。

それから、まもなくして、日暮れになると、七人の小人たちは、家に帰つて来ました。ところが、かわいい白雪姫が土間にたおれて、死んだようにピクリとも動かないのを見たとき、七人の小人たちは、ひどくおどろいてしまいました。小人たちが白雪姫をだき起こしてみると、白雪姫の胸がひもできつくしめつけられていることが分かりましたので、小人たちは、その飾りひもを真つ二つに切りました。すると、白雪姫は、ちよつと息をし始め、だんだんと元氣になりました。小人たちは、どうしてそんなことになったかを聞くと、こう言いました。「商いのおばあさんは、まちがいをなくお妃さまだったのさ。氣をつけるんだよ。おいらたちがそばにいないときにや、だれも中へ入れちゃだめだよ。」さて、よこしまな女は、家に帰ると、鏡の前へ行つて、こうたずねました。

「壁の鏡よ、教えておくれ、
国中で一番の美人は、だーれ。」

すると、鏡は、この前と同じように答えました。

「お妃さま、この国で一番の美人は、お妃さーま。

けれど、お妃さまより、千倍も美人なのはな、

お山の向こうの、小人たちのもとのな、

白雪姫さーま。」

お妃さまは、これを聞くと、全身の血が頭にのぼって、カッカとするほどおどろきました。というのも、白雪姫が再び生き返ったことが、はっきりと分かったからです。「いいか、見ている」と、お妃さまは言いました。「今度こそ、いい考えをひねりだして、おまえを殺してやるわい。」こう言って、お妃さまは、こころえのある魔術で、毒のあるクシを一つ作りました。それから、お妃さまは、前とは別のおばあさんに変装しました。そうして、お妃さまは、七つのお山をこえて、七人の小人たちの家へ行き、戸をたたいて、こう呼びかけました。「いい品物は、いらんかねえー、いらんかねえー！」白雪姫は、窓から顔を出して、こう言いました。「もう、向こうへ行つてちようだいな、あたし、だれも中へ入れちゃいけないの。」「見るだけなら、よござんしよ」と、おばあさんは言つて、毒のあるクシを取りだして、それを高くかざして見せました。すると、そのクシは、子どもの白雪姫には大変気に入ったものですから、それに心がうば

われて、戸をあけてしまいました。白雪姫が、そのクシを買うことにきめると、おばあさんは、こう言いました。「それじゃ、わしが一つ、おまえさんの髪をちゃんとしてあげよう。」かわいそうに、白雪姫は、なんにもうたがわず、おばあさんの言うままにさせました。ところが、おばあさんが、クシを白雪姫の髪に刺すと、たちまちクシの毒が回って、白雪姫は、氣を失って、たおれてしまいました。「絶世の美人さんよ、これでおまえさんも、あの世行きじゃよ」と、よこしまな女は言って、家を出ました。けれども、さいわいなことに、まもなく日が暮れて、七人の小人たちが家に帰って来ました。小人たちは、白雪姫が死んだようになって土間にたおれているのを見たとき、すぐさま、よこしまなまま母にうたがいをかけましたので、あたりを探して、毒のあるクシを見つけました。そこで、小人たちが、そのクシを髪からぬき取ると、白雪姫は、再び息をふきかえして、それまでのできごとを小人たちに話して聞かせました。これを聞いて、小人たちは、ちゃんと氣をつけて、だれが来ても戸をあけないように、白雪姫にもう一度念をおして注意しました。お妃さまは、家に帰ると、鏡の前へ行行って、こう言いました。

「壁の鏡よ、教えておくれ、

国中で一番の美人は、だーれ。」

すると、鏡は、この前と同じように答えました。

「お妃さま、この国で一番の美人は、お妃さまよ。

けれど、お妃さまより、千倍も美人なのはな、

お山の向こうの、小人たちのものな、

白雪姫さーま。」

お妃さまは、鏡がこのように言うのを聞くと、いかりのあまり、体をブルブルふるわせました。「白雪姫のやつ、殺してくれる」と、お妃さまは叫びました。「たとえ、あたしの方が死ぬことになろうともな。」こう叫ぶと、お妃さまは、だれもこない秘密の隠れがに入って、毒毒しい毒リンゴを一つ作りました。そのリンゴの見かけは、とても美しく、青地に赤いほっぺをもったリンゴで、そのリンゴを目にした者はだれでも食べたくなってしまうのでした。ところが、それを一口食べたなら、その人は死ぬしかありませんでした。リンゴができあがると、お妃さまは、顔に絵具をぬって化け、百姓女の着物を着こみ、そうして、七つのお山をこえ、七人の小人たちの家へと向かいました。百姓女が戸をたたくと、白雪姫は、窓から顔を出して、こう言いました。「だれもおうちへ入れちゃいけないの。七人の小人さんたちに、だめってきつく言われているから。」「かまやしないよ」と、百姓女は言いました。「あたしや、リンゴをね、みんな片付けてしまいたいだけなのさ。ほら、あんたにも一つあげましょ。」「いらないわ」と、白雪姫は言いました。「なんにももらっちゃいけないのよ。」「毒でも入っているんじゃないかって、こわがってでもいるのかい」と、百姓女は言いました。「ほーら、いいかい、リンゴを二つに切るからね。赤い方を、あんたがお食べ。わたしや、青い方でいいから。」ところが、このリンゴは、とてもじょうずに作ってあって、赤い方だけに毒が入っているのです。白雪姫は、そのみごとなりリンゴを食べたくてしろうがありませんでしたので、百姓女がそのリンゴを食べるのを見てみると、もうそれいじょうがまんがでなくなつて、手をさしだして、毒のある方のリンゴを取りました。そして、白雪姫がそのリンゴをかじりして口に入れると、たちまち白雪姫は、土間へたおれて、死んでしまいました。すると、お妃さまは、ぞっとす

るようなおそろしい目つきで白雪姫を見つめていましたが、大声で笑いだして、こう言いました。「お肌が雪のように白いわねえ、唇が血のように赤いわねえ、髪がコクタンの木のように黒いわねえ！ 今度ばかりは、小人どもにも、おまえの目をさますことなんか、できやしない。」そうして、お妃さまが家に帰って、鏡にたずねました。

「壁の鏡よ、教えておくれ、

国中で一番の美人は、だーれ。」

すると、鏡は、ついにこう答えました。

「お妃さま、国中で一番の美人は、お妃さま。」

これを聞くと、お妃さまの嫉妬心も、それなりに落ち着きました。小人たちは、日が暮れて家にもどって来ると、土間に白雪姫がたおれているのを見つけました。白雪姫は、もはや息をしているけはいもありません。もう、死んでしまったのです。小人たちは、白雪姫をだき起こし、なにか毒のついたものはないかと探してみました。それから、胸の飾りひもといたり、髪をといたり、体を水やブドウ酒で洗ったりしました。けれども、なんの役にも立ちませんでした。かわいい子どもは、死んで、生き返ることはありませんでした。小人たちは、白雪姫を棺台の上へ寝かせ、七人が七人も棺台にすがって、白雪姫の死をなげき悲しみ、三日間泣き通しました。それから、小人たちは、白雪姫を埋葬しようと思いました。けれども、白雪姫は、まだ生きている人間のように、みずみずしく見えましたし、それに、まだ美しく赤

いほつぺをしていました。小人たちは、「こんな白雪姫を、黒い土くれの中へうめるなんてできないよ」と言いました。そこで、小人たちは、白雪姫が四方八方から見えるように、ガラス製のすき通った棺を作らせ、白雪姫をその中へ寝かせました。それから、小人たちは、棺の上に、金文字で白雪姫の名前を書き、また、そこに王さまの娘という身分もして置きました。そのあとで、小人たちは、棺をお山の上へすえて、七人のうちの一人が、いつでもそこにとどまっています。棺の番をしました。すると、いろんな動物たちもやって来て、白雪姫の死を悲しんで、涙を流しました。最初にはフクロウがやって来て、次にはカラスがやって来て、最後にハトがやって来ました。

こうして、白雪姫は、とても長い間、棺の中に横たわっておりましたが、くされくちることはありませんでした。それどころか、白雪姫は、まるで眠っているかのように見えました。というのも、白雪姫の肌はまだ雪のように白く、唇は血のように赤く、そして、髪はコクタンの木のように黒かったからです。ところが、ある日のこと、一人の王子さまが、森の中へまよいこんで、小人たちの家にやって来て、そこに泊めてもらうということがありました。王子さまは、お山の上で例の棺を見つけ、その中にいる美しい白雪姫を見つめ、棺の上に金文字で書かれていますことも読みました。すると、王子さまは、小人たちに向かって、「この棺を、ぼくにゆずってください。お礼なら、あなたがたの好きだけあげますから」と言いました。けれども、小人たちは、こう答えました。「世界中のお金を全部くれても、この棺はあげません。」そこで、王子さまは言いました。「それでは、その棺を、ぼくのおくり物にしてください。なんととっても、ぼくは、白雪姫を見ないでは生きて行けないんだから。ぼくは、白雪姫をぼくの一ばん大切なものとして、心から大事に見守るつもりだよ。」王子さまが、こう言うと、心根の良い小人たちは、あわれに思つて、王子さまに棺をあげました。こうして、王子さまは、その棺を自分の召使いたちにかついで運ばせました。すると、召使いたちは、やぶに足をとられて、よろめいてしまいました。ゆれたひょうしに、白雪姫がかみくだいてのんでいた毒のあるリンゴのくいかけがのど

から飛びでて、白雪姫は、再び息をふきかえしました。それで、白雪姫は、体を起こすと、こう言いました。「あら、どうしたんでしょ、あたし、どこにいるのかしら。」王子さまは、喜んで、こう言いました。「あなたは、ぼくのそばですよ。」こう言つて、王子さまは、これまで起きたことを白雪姫に話して聞かせてから、「ぼくは、世界中のだれよりも、あなたが好きです。ぼくといっしょに、父上の城へ行きましょう。ぼくは、あなたを妻として迎えるつもりです」と言いました。すると、白雪姫も、王子さまを好きになり、王子さまについて行きました。こうして、二人の結婚式が、とても盛大に、そして、はなやかに整えられました。

さて、結婚のお祝いには、白雪姫のばちあたりのまま母も招待されておりました。ママ母が、美しい衣装を身につけたとき、鏡の前へ行つて、こう言いました。

「壁の鏡よ、教えておくれ、

国中で一番の美人は、だーれ。」

すると、鏡は、こう答えました。

「お妃さま、この国で一番の美人は、お妃さーま、

けれど、お妃さまより、千倍も美人なのは、白雪姫さーま。」

これを聞いて、よこしまな女は、呪いの文句をはきましたが、とても不安で不安で、どうしたら良いのか分からない

ほどでした。ママ母は、初め結婚式へ行くのは、きれいさっぱり忘れようかと思いましたが、けれども、それはまたそれで落ち着きません。ママ母は、どうしても出かけて、その若い女王を見ずにはいられません。こうして、ママ母がお祝いの広間に入ると、ママ母は、その若い女王が白雪姫であることに気づきました。ママ母は、おどろきと不安のあまり、その場に立ちすくみ、身じろぎすらできませんでした。ところが、すでに鉄製の靴が炭火の上に乗せられていて、真っ赤に焼けた鉄の上靴が、広間に運びこまれて来ました。ママ母は、その真っ赤に焼けた鉄の靴をはいて、踊らなければなりません。ママ母の両足は、ひどく焼けたりましたが、それでも踊りをやめることは許されませんでした。とうとう、ママ母は、踊り死んでしまいました。

『黄金の鳥』(KHM五七)

むかしむかし、あるところに、一人の王さまがおりました。王さまは、すばらしい庭園をもっておりましたが、その中には黄金のリンゴがなる木が一本生えていました。リンゴの実が熟すると、その数はかぞえられていたのですが、あくる朝になると、早くも実が一つなくなっていました。このことを王さまに申し上げますと、王さまは、每晚その木の下に見張りを立てるよう命じました。王さまには、三人の王子さまがおりましたが、その中で一番年上の王子さまを、日暮れになると、庭へ行かせました。ところが、真夜中になると、眠気をおいはらうことができずして、あくる朝になると、リンゴが、また一つなくなっていました。次の夜には、二番目の王子さまが、見張りに立つことになりましたが、この王子さまも大してうまくゆきませんでした。真夜中の十二時になると、王子さまは眠りこみ、あくる朝にな

ると、リンゴが一つなくなっていました。いよいよ、見張りの番が、三番目の王子さまに回ってきました。王子さまもまた、そのつもりでおりました。ところが、王さまは、この王子さまをあまりあてにしておりませんでした。王さまは、こいつは、兄たちよりも、もつとどじをふむじやろ、と考えておりました。それでも、王さまは、とうとう最後には、やらせてみることにしました。こうして、この王子さまは、リンゴの木の下に寝ころびながら見張っておりますが、眠気に負けはしませんでした。

十二時の鐘が鳴ると、空中をかけて、なにかざわめくものがありました。そのとき王子さまは、月の光をあびて、一羽の鳥が飛んで来るのを見ました。なんと、その鳥の羽は、全部黄金でできていました。鳥がリンゴの木にとまり、ちようどリンゴの実を一つつえばもうとしたとき、王子さまは、鳥をめぐがけて弓矢を放ちました。鳥は逃げてしまいました。だが、それでも、その弓矢は、鳥の羽にあたって、黄金の羽が一枚落ちて来しました。王子さまは、その羽を拾って、あくる朝、その羽を王さまのところにもって行って、夜中に見たことをすべて話しました。王さまは、相談役たちを集めました。すると、どの相談役も、このような羽は、王国全体よりももつと値打ちがあると、口をそろえて言いました。これを聞いて、王さまは、こう言いました。「この羽が、そんなに高価なものならば、一枚つきりでは、なんの役にも立たん。わしは、その鳥をまるごと欲しいし、いや、手に入らずにはおかんぞ。」

長男が、旅に出かけました。この王子さまは、自分が利口だと信じこんでおりましたので、黄金の鳥を見つけるのは自分だと考えておりました。王子さまが、しばらく行きますと、森のはずれに一匹のキツネがいるのが見えました。そこで、王子さまは、鉄砲を構えて、キツネをねらいました。キツネは、こう叫びました。「撃たないで！ そのかわり、おまえさんにいいことを教えてあげるよ。おまえさんは、黄金の鳥を探して旅してるんだろ。おまえさんは、今晚とある村に着くよ。そこには、二軒の宿屋が向かい合ってたってるんだ。一軒には、あかりがカンカンついていて、中のようなす

もにぎやかだよ。でもね、そこに入っちゃいけない。そうじゃなく、もう一軒の方へ入んなさい。たとえ、見かけが粗末でもね。」「こんなばかなけもの、このおれさまに気のきいたことなんか教えられるもんか！」と考えて、鉄砲を撃ちましたが、キツネにはあたりませんでした。キツネは、しつぽをピンとのぼして、すばやく森の中へ走って行きました。王子さまは、道をどんどん進んで、夕方にはその村に着きました。そこには、二軒の宿屋があつて、一軒の方では、歌え踊れの騒ぎでしたが、もう一軒の方は、みすぼらしく、陰気なようすでした。「おばかさんつてもんだらうよ」と、王子さまは考えました。「もしおれさまが、りっぱな宿を捨て置いて、こんなおんぼろ宿に泊まつたらな。」こうして、王子さまは、にぎやかな宿屋の方に入って、そこで飲めや歌えの生活をしているうちに、鳥のことも、父親のことも忘れてしまいました。

時がしばらくたちましたが、長男は、いつになつても家へ帰つて来ませんでした。そこで、次男が、黄金の鳥を探そうと、旅に出かけました。長男と同じように、次男がキツネに出会いますと、キツネは、いいことを教えたのですが、次男は聞く耳をもちませんでした。次男が二軒の宿屋のところに来ると、長男が、にぎやかな声が鳴り響いている宿屋の窓から、次男に呼びかけました。次男は、それにさからえず、長男と同じ宿屋に入り、そこでおもしろおかしい生活を送りました。

またまた、時がしばらくたちました。すると、一番年下の王子さまが、運だめしに旅に出かけた、と言いました。ところが、王さまは、これを許しませんでした。というのも、王さまは、あいつは兄たちほど利口じゃないから、きつと災難にでもあつて、また帰つてこれないはめになるじゃろよ、と考えていたからです。ところが、この王子さまは、ちつとも静かにしておりませんでしたので、とうとう王さまは、この王子さまを旅に出してやりました。森の前には、またしてもキツネがいて、命ごいをしてから、いいことを教えてくれました。この若い王子さまは、お人好しでしたから、こ

う言いました。「キツネくん、安心しなよ。ほくは、きみになんにもしないから。」「おまえさんには、後悔させないから」と、キツネは答えました。「もつと速く進めるように、おいらのしっぽに乗っかってよ。」王子さまが乗っかるやいなや、キツネは走りだし、木の根っこでも石ころでも跳びこえて行きましたので、キツネの毛は、風でヒューヒューと鳴りました。村に着くと、王子さまは、キツネのしっぽから降りて、キツネが教えてくれたように、わきめもふらずに、みすぼらしい宿屋に入つて、その夜を静かにすごしました。あくる朝、王子さまが野原にやつて来ると、すでにキツネがそこにいて、こう言いました。「これから、おまえさんのしなきやならんことを教えてやろう。どんどんまっすぐ行くんだよ。そうすりや、しまいにや、とあるお城に出るがね、お城の前にやおおぜいの兵隊たちが寝ころんでいるんだ。ところがね、それにかまっちゃいけない。兵隊たちはみいーんな寝ていびきをかいているんだから。そのどまん中を通つて、お城の中へ入るんだ。そうして、部屋を一つ残らず通りぬけると、一番奥の部屋に出る。そこに、黄金の鳥が入っている木のかごがあつて、そのとなりに、きらびやかな黄金のかごがある。でも、いいかい、その鳥を粗末なかごから出して、豪華な方へ入れかえちゃいけないよ。そんなことすりや、ひどいめにあうからね。」こう言つと、キツネは、再びしっぽをピーンとのばし、王子さまは、その上に乗りました。すると、キツネは、木の根っこでも石ころでも跳びこえて行きましたので、キツネの毛は、風でヒューヒューと鳴りました。王子さまが、お城のそばに到着すると、なにもかも、キツネの言つた通りでした。王子さまが部屋の中に入ると、そこには木のかごに入つた黄金の鳥がおり、そのとなりに、黄金のかごが置いてありました。それから、部屋の中には三つつの黄金のリングがあたりにころがっていました。そこで、王子さまは、もしこの美しい鳥を、みすぼらしくして粗末なかごに入れたりしちゃ、とんだ笑ひ者だよ、と考へて、かごの戸をあけ、鳥をつかんで、黄金のかごの中へ入れました。ところが、そのとたんに、鳥は、つんざくような声を上げました。すると、兵隊たちが目をさまし、部屋の中へなだれこんで来て、王子さまを牢屋へ入れてしまいました。あくる朝、王子

さまは裁判にかけられ、そこでなにかも白状すると、死刑の判決を受けました。それでも、王さまは、一つの条件をだして、もし王子さまが、風よりも速く走る黄金の馬をつれて来たら、命は助けてあげよう、おまけに、黄金の馬もくれてやる、と言いました。

王子さまは、出かけましたが、ため息ばかりついておりました。というのも、どこに行けば、黄金の馬が見つかるのか、まるで見当もつかなかったからです。すると、王子さまは、思いもかけず、道ばたに友だちのキツネくんの姿を見つきました。「いいかい」と、キツネは言いました。「こうなってしまうのは、おまえさんが、おいらの言うことを聞かなかったからだよ。だけど、元気をだしなよ。おいらが、おまえさんのめんどろを見てあげるから。どうすれば、黄金の馬のところに行けるのか、おまえさんに教えてあげるよ。おまえさんはね、まっすぐ道を進むんだ。そうすりゃ、とあるお城に出るのさ。馬は、そのお城の馬小屋にいるよ。馬小屋の前にや、馬丁たちが、ごろごろ横になっているけど、みんな寝ていびきをかいているのさ。だから、おまえさんは、安心して黄金の馬をつれだせるよ。でもね、一つ気をつけなきゃならない。その馬には木と革でできた粗末な鞍を置くんぞ。そばにある黄金のやつを置いちゃいけないよ。そんなことすりゃ、ひどいめにあうからね。」こう言うと、キツネは、しっぽをピンとのばし、王子さまは、その上に乗りました。キツネは、木の根っこでも石ころでも跳びこえて行きましたので、キツネの毛は、風でヒューヒューと鳴りました。なからななまで、キツネの言った通りでした。王子さまは、黄金の馬がいる馬小屋の中へ入りました。王子さまは、黄金の馬に粗末な鞍を置こうとしたとき、「こんなに素晴らしい馬なんだから、この馬にふさわしいりっぱな鞍を置かなければ、馬をぶじよくするつてもんさ」と考えました。ところが、黄金の鞍が馬にふれるやいなや、馬は、大きな声でいななき始めました。すると、馬丁たちは目をさまし、王子さまを捕らえ、牢屋にほうりこみました。あくる朝、王子さまは、裁判にかけられて、死刑の判決を受けました。けれども、王子さまは、もし王子さまが、黄金城の美しいお姫さまをつれ

てこれたら、命を助けた上に、黄金の馬もあげよう、と約束してくれました。

悲しみにくれて、王子さまは、出かけました。幸運なことに、王子さまは、まもなく例の忠実なキツネの姿を見つけました。「おまえさんは、自分で自分の不幸をまねくんだから、おいらにも、手のほどこしようないな」と、キツネは言いました。「けど、おまえさんが気の毒だから、もう一度窮地から救ってあげよう。この道をまっすぐ行くと、黄金城に出るんだ。夕方に着くと思うけど、夜になって、あたりがシーンとなると、美しいお姫さまが、お湯をあびに湯殿へ行くのさ。お姫さまが、湯殿の中へ入ったら、お姫さまに跳びついて、キスをしな。そうすりゃ、お姫さまは、おまえさんについて来て、お姫さまをつれだすことができるさ。でも、いいかい、つれだす前に、親御さんたちに、さよならを言わせちゃいけないよ。そんなことすりゃ、ひどいめにあうからね。」こう言うと、キツネは、しっぽをピンとのばし、王子さまはその上に乗りました。キツネは、木の根っこでも石ころでも跳びこえて行きましたので、キツネの毛は、風でビュービューと鳴りました。王子さまが、お城に到着すると、そのようすは、キツネが言った通りでした。王子さまは、真夜中になるまで待ちました。真夜中になって、なにかもが寝静まったころ、きりようよしのお姫さまは、お湯殿へ入りました。すると、王子さまは、跳びでて、お姫さまにキスしました。お姫さまは、喜んで王子さまと行きたい、と言いましたが、その前に両親にお別れのあいさつをしたいと、涙を流して、けんめいに王子さまにたのみました。王子さまは、初めのうちは、お姫さまの願いを聞き入れずにおりましたが、お姫さまが、ますます激しく泣いて、王子さまの足もとにひれふすと、とうとう王子さまは、負けてしまいました。ところが、お姫さまがお父さんのベッドに行くと、たちまち、お父さんも、それから、城中の人人が目をさましました。そこで、王子さまは逮捕され、牢屋に入れられました。

あくる朝、王子さまは、王子さまに向かつて、「おまえの命は、もうおしまいじゃよ。じゃがな、助かる道が一つだけあ

るぞ。わしの部屋へやの窓まじの前まえにあつて、わしの見晴らしをさえぎっている山やまをな、取り除といてくれたなら、それも一週間いっしゅうかん以内に片付かたづけてくれたなら、そのほうびに、わしの娘むすめをおまえにあげよう。」王子さまは、仕事しごとに取りかかり、休やすむひまもなく、土つちを掘ほつて、シヤベルですくい取りました。ところが、七日ななかたつても、仕事しごとはほとんどはかどらず、しないも当然ぜんぜんであることに気づききますと、王子さまは、とても悲かなしくなつて、すっかり望のぞみを捨ててしまいました。すると、七日目ななかめの晩ばんになつて、キツネが姿すがたを現あらわして、こう言いいました。「おまえさんは、めんどろの見みがない人ひとだねえ。でも、まあ、向むこうへ行いつて、眠ねむんなさい。おいらが、おまえさんのかわりにしてあげるから。」あくる朝あさ、王子さまが目めをさまして、窓まじから外そとをのぞくと、山やまは影かげも形かたちもありません。王子さまは、大喜およろこびで、王子さまのところへ行ゆき、約束やくそくの仕事しごとをはたしたことを王子さまに伝つたえました。そこで、王子さまは、いやでもおうでも、約束やくそくを守まもつて、王子さまに娘むすめを与あたえないわけにはゆきませんでした。

さて、王子さまとお姫さまは、お城しろから出て、いっしょに旅たびに出でかけました。すると、まもなく、例れいの忠実ちゅうじつなキツネが、二人ふたりのところへやつて来きました。「なるほど、おまえさんは、一番いちばん良いものを入いれたけど」と、キツネは言いいました。「でもね、黄金城おうごんじょうのお姫さまには、黄金おうごんの馬うまもいるんだよ。」「どうしたら、手てに入いれられるのかね」と、王子さまはたずねました。「それを、おまえさんに教おしえてあげよう」と、キツネは答こたえました。「まず、おまえさんを、黄金城おうごんじょうへつかわした王おうさまのところへ、お姫さまをつれて行くのさ。そうすりゃ、王おうさまも、お城しろの人人ひとびとも、これまでになく大喜よろこびで、おまえさんに喜よろこんで黄金おうごんの馬うまをあげようと、目めの前まえにつれて来くるだろうさ。そしたら、すぐさま、その上うえに乗のつて、みんなにお別わかれの握あくしゆ手てをするんだ。きりようよしのお姫さまとの握あくしゆ手ては、最後さいごにするんだよ。お姫さまの手てをつかんだら、お姫さまをひらりと馬うまに乗のつけて、とんずらするのさ。そうすりゃ、だあれもおまえさんには、追おいつけやしないよ。なんとつて、その馬うまは、風かぜよりも速はやく走はしるんだからね。」

なにもかもうまくいって、王子さまは、きりようよしのお姫さまを黄金の馬に乗せて、つれ去りました。キツネも、あとに残らず、いっしょについて来て、王子さまにこう言いました。「今度は、おまえさんが黄金の鳥を手に入れるお手伝いをしてあげるよ。おまえさんが、黄金の鳥のいるお城に近づいたらね、お姫さまを馬から降ろすのさ。そしたら、おいらがお姫さまをあずかってあげるよ。おまえさんは、黄金の馬に乗って、お城の中庭へ入るんだ。それを見ると、お城の人人は大喜びで、おまえさんのところへ黄金の鳥をもつて来るだろうさ。そのかごを手にしたら、急いでおいらたちのところへもどって、またお姫さまをつれて行けばいいだろ。」このくわだてもうまくゆき、王子さまが馬に乗り、宝物をもつて、家へ帰ろうとすると、キツネはこう言いました。「さあ、今度はおまえさんが、手助けのごほうびを、おいらにくれる番だよ。」「ほうびになにが欲しいんだね」と、王子さまがたずねました。「あそこの森の中へ入ったらね、おいらを撃ち殺して、首と両手両足をちよんぎつてくれ。」「そりゃ、とんでもない恩返しだよ」と、王子さまは言いました。「そんなこと、とうていできやしない。」すると、キツネは言いました。「おまえさんが、そうするつもりがないのなら、おいらはおまえさんと別れにやならない。でも、立ち去る前に、もう一つ助言してあげよう。二つのことに気をつけなよ。首つり台にある肉を買っちゃいけないよ。それと、井戸のふちに腰をかけちゃいけないよ。」「こう言つて、キツネは、森の中へかけて行きました。

王子さまは、こう考えました。「あいつは、奇妙なきまぐれを思いつく、変なけものだな。首つり台の肉など、だれが買ったりするもんか！ それに、井戸のふちに腰をかけたかと思つたことなど、一度だつてありやしない。」王子さまは、きりようよしのお姫さまといっしょに、馬に乗って進みました。その道は、二人の兄たちが残っている村に続いていました。村では、人だかりができて、大騒ぎになっていました。そこで、王子さまが、なにが起きたのかたずねると、二人の者が首つりの刑に処せられるという話でした。王子さまが、そちらの方へもつと近づいて見ると、それは二人の兄

たちで、ありとあらゆる悪事を働いて、あり金すべてを使い果たしてしまつていたのでした。王子さまは、二人を釈放できないものかどうか聞いてみました。「あんたが、あの二人のために身の代金を出すつもりならば、できるがね」と、人人は答えました。「けれど、なんであんたは、悪党どものために金をはらつてまで、あいつらを自由にしてあげたいのかね。」ところが、王子さまは、そんなことにはおかまいなく、身の代金をはらいました。そうして、二人が釈放になると、二人の兄たちは、王子さまといっしょに旅を続けました。

一行は、キツネと最初に出会つた森の中へ入りました。森の中は、ひんやりとして、ここちよく、他方お日さまの方は、カンカン照りでしたから、二人の兄たちは、こう言いました。「この井戸のほとりで、飲んだり食べたりして、ちよつと休もうや。」王子さまは、これに賛成しましたが、話しこんでいるうちに、ついうっかりして、井戸のふちに腰をかけてしまいました。二人の兄たちに良からぬ考えがあろうとは、まったく予期していませんでした。ところが、二人の兄たちは、王子さまをおむけに井戸の中へつき落とし、お姫さまと馬と鳥をうばつて、お父さんの家へと帰りました。二人の兄たちは、「ほら、ぼくたちは、黄金の鳥ばかりではなく、黄金の馬も、黄金城のお姫さまもぶんどつて来ました」と言いました。すると、お城の人人は、大喜びでした。ところが、馬はと言えば、なんにも食はず、鳥はと言えば、ちつとも鳴かず、お姫さまはと言えば、泣くばかりでした。

さて、末の王子さまは、死んではおりませんでした。井戸は、幸運にも、かれています。それで、王子さまは、やわらかなコケの上に落ちて、けがもしませんでした。外へ出ることができませんでした。この窮地にあつても、例の忠実なキツネは、王子さまを見捨てずに、井戸の中へ跳び降りて来て、自分の忠告を忘れたことで王子さまをしっかりとつかんで、こう言いました。「やっぱり、おまえさんを見捨てるわけにやいかな。」キツネは、自分のしつぽをつかんで、しがみついているよう王子さまに言いつけると、上へはい上がつて、王子さまを井戸から引き上げてあげました。「おまえさ

んは、まだすっかり危険からのがれたというわけではないよ」と、キツネは言いました。「兄さんたちは、森に見張りを立たせておいて、もしおまえさんが助かって、姿を現したら、殺してしまうよう命令しているんだよ。」そのとき、一人の貧しい男が道ばたに座っておりましたが、王子さまは、この男と着物を交換して、王さまの宮廷にやって来ました。だれも、それが王子さまだと気づきませんでした。ところが、鳥は鳴き始め、馬はえさを食べ始め、きりようよしのお姫さまは、泣くのをやめました。王さまは、ふしぎに思つて、「これはどうしたわけじゃ」とたずねました。すると、お姫さまは、こう言いました。「わたくしにも分かりません。でも、わたくしは、これまであんなに悲しかったのですが、今はとてもうれしくなりません。まるで、わたくしの本当のお婿さまが、おいでになつたかのような気がいたします。」お姫さまは、もしなにか秘密をもらしたら、殺すぞと、二人の兄たちにおどされていたにもかかわらず、王さまにそれまでのことをなにもかも話してしまいました。王さまは、お城にいる人人を一人残らず、自分の目の前に呼びだしました。すると、乞食のなりをした王子さまもやって来ましたが、お姫さまは、すぐにそれが王子さまだと気づいて、その首に抱きつきました。極悪非道な兄たちは、捕らえられ、処刑されました。こうして、王子さまは、きりようよしのお姫さまと結婚して、王さまの世継ぎとなりました。

それにしても、例のあわれなキツネは、どうなつたのでしょうか。それから長いことたつて、王子さまが、あるとき再び森の中へ入りますと、キツネと出会いました。すると、キツネは、こう言いました。「さてはて、おまえさんは、幸せになつたけど、おいらの不幸は、いっこうに無くならないよ。なんだつて、おいらを救うのは、おまえさんの力しだいなんだがね。」こう言つて、自分を撃ち殺して、首と両手両足をちよんぎつて欲しいと、またもや必死にたのむのでした。そこで、王子さまは、望み通りにしてあげました。そうすると、たちまちキツネは、人間の姿に変わりました。それは、きりようよしのお姫さまのお兄さんにほかなりませんでした。このお兄さんは、かけられた魔法から、やつこのこ

とでとかれたのでした。こうして、一生、三人は、なに一つ不自由なく、幸せに暮らしました。

注

- (1) 野口芳子『グリムのメルヒェン その夢と現実』勁草書房、一九九四年、一一四―一七頁参照。
- (2) 『初版 グリム童話集』(全四巻) 吉原高志・吉原素子訳、白水社、東京一九九七年。
- (3) 『完訳 グリム童話集』(全五冊) 金田鬼一訳、岩波書店、東京一九八一―八二年。
- (4) 桐生操『本当は恐ろしいグリム童話』KKベストセラーズ、東京一九九八年。／桐生操『本当は恐ろしいグリム童話 二』KKベストセラーズ、東京一九九九年。／三浦祐之(監修)『童話ってホントは残酷』二見書房、東京一九九九年。／桜澤麻衣(編)『グリム童話九九の謎』(童話ってホントは残酷第二弾)二見書房、東京一九九九年。／藤野紀男『グリム童話より怖いマザーグースって残酷』二見書房、東京一九九九年。／金成陽一『グリム童話のなかのぞつとする話』大和書房、東京一九九九年。／由良弥生(大人もぞつとする原典『日本昔ばなし』)三笠書房、東京一九九九年。
- (5) 深層心理研究会(編)『本当は恐ろしい! 日本むかし話』竹書房、東京一九九九年。
- (6) 拙論『新しい認識の原理——ホフマンの『黄金の壺』におけるグロテスク様式——』、鹿児島大学法文学部「人文学科論集」第一八号所収、一九八三年、一五九―一六五頁参照。
- (7) 拙論(ホフマン文学における「短編小説風童話」について——童話概念規定の試み——)、鹿児島大学法文学部紀要「人文学科論集」第二六号所収、六二―六四頁参照。
- (8) 野村滋(書誌「日本におけるグリム研究文献」『ドイツ文学』第八〇号所収、日本独文学会、東京一九八八年、一二五―一五四頁参照)。
- (9) 『しらゆきひめ』構成・文／卯月泰子、画／藤田素子、永岡書店、東京一九九六年、一―四五頁参照。
- (10) 同書、四一―四三頁参照。
- (11) 小澤俊夫『グリム童話の誕生』朝日新聞社、東京一九九七年、一〇〇―一三〇四頁参照。／『素顔の白雪姫』光村図書出版株式会社、東京一九八五年、一三四―一五九頁参照。
- (12) 小澤俊夫『グリム童話の誕生』、七〇―一三三頁参照。

- (13) 鈴木晶『グリム童話』講談社、東京一九九一年、五一―五二頁参照。
- (14) Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm. Hrsg. v. Heinz Rölleke. Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt am Main 1985.
- (15) Vgl. ebenda: S. 1158-1163. / 初版から第七版に至るまでの改正に関して、グリム兄弟の生涯についての詳細な伝記を記したG・ザイツは、次のように要約している。「改作の最も重要な文体上の特徴としては次のような点が挙げられる。すなわち、間接話法を直接話法に入れ替えること、縮小形の導入、古風な言い回し、民衆的な二重表現、慣用句と比較、頭韻の結合、ことわざ 諺と擬音である。さらに、ヴェルヘルムはストーリー経過のより明確で豊かな動機づけ、より動きのある気分^{ことわざ}に満ちた状況描写を求めて努力した。しかしまた、内容的な変更も彼はもくろみ、性的にいやらしいと感じられるかも知れない箇所を除去しないしは書き換え、またキリスト教的な価値観念によって規定された補足部分を挿入した。」(ガブリエーレ・ザイツ『グリム兄弟』高木昌史・高木万里子訳、青土社、東京一九九九年、一四二頁。
- (16) Vgl. ebenda: S. 1164-1165.
- (17) Vgl. ebenda: S. 1162.
- (18) Vgl. ebenda: S. 1164.
- (19) Vgl. ebenda: S. 1164-1165.
- (20) Vgl. ebenda: S. 1159.